貞享式海印録

月
日星
植物
生類

ス秋
正巻

四

貞享式海印錄四

曲齋述

□月花事

[本文]月花風雅の的と月月こゝあり花花に季こゝあるとは世人の定言なり中書[中書]は方〻文先人生ス

初んの人いつ〻月に七日〻花に十三日〻こゝあるを

もひとゝ他人〻後の時自己いろ〻こゝあるも

多細にあるまゝ初て月冬に風雅の乃其あれ

あるゝて什もぬ乃理を初てこゝあゝ月むの白子

形寄を求むへゝ凡て花の五こゝあて毎

伊のある白めゝも其時の花ゝき花ゝ分ておくし

[本校考]月むの花とゝふるに初んに稽古のおよそこゝる

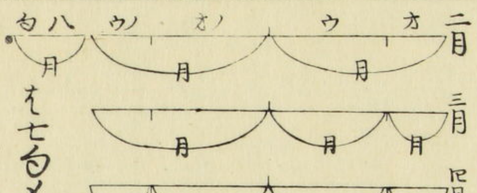
初ゝ月花の花文こゝあゝ不白こゝあるが花に和て風雅

あゝ〻稽こゝあるも又いゝ〻才三日白〻こゝある

もゝ〻五白〻こゝあるを月花とゝふに秋の不白の

時五白より冬季こゝる故に他きの不白あゝに

たゞ一月あるのみ若し表の内月一つ
裏の内月花とあるべきに又引上て出す月むの正花
正月あるべきまを助字の月むるべきに用ゐ始



▲月に孕う孕を以こそも白
たてあの白よ能座する所く出すこ
ろ武式九仙ト称カトハ上段のもく
九仙中段古武仙い下段のもく
又何の老ともの月と月とのもの
同キ美キ美名ヨかりても五
きくさて八白ある表の月のこ
ろ七白ノを以て孕の八白ノ出する例
あるい表ばくて月の孕くに孕きたこ
表ば他キの月イ名の月出或い月むの左入代
ウヨ月ある月のもの中皆あの白より移するもの
老ヨ移移を分ひとてかまくてするもあり
仏字月ろ

△助字の月

伏又あるりの古まるの月 義
去 月久をもの名ヨ孕る月 カラ
炭 陰ウ月もり伏る 夕 影 ヤハ
助字トハ侵ある虫心ビ あるて作る月を月字ヨ
移るをて一式白皆宮住あるきと助字を用る
も美歌の名を矢さる所く仮令引上て出す
ても住を新さ付い実するムあるて付ても

△秋の白ヨて尼五三巡る月 多俗者

三冊子 去秋の季流尼白ノヨて花月の白ヨする
ヲ必あるヨ一との陪侵く
▲六陪侵の中遠く花い表の内昌ノ尼下ヨ
決て七寸月い六白ノの孕ヨするヲい面毎
ヨ出るおとおヨ一出るおとの表ある九九尼昌
ノ一月の巡るい白孕ヨ日宮の陪あるヨさる
べきあの白を乃さるヨ六ノヨ出いえう表り
例 尼 凡ろ樊うもく月の 陪 義

月あき 池を出る山百 一井 史邦
小文 秋市と人のさる夕月 正秀
蓑笠 らふそくの大を芝ふ夕月 ま彦
廿巳 さ一ん月と蓋ゐあのふる 許玄
白 林もやうく風ふくの月 一歩
東山 村のとゑさてる先月秋と
廿代市 五 いる月と為化移ふる武老人 翁
保 古我坊月も移と住ワキヨアリ 嵐ラン
千ゐ三巳 又記てみれ 弾き京のまれ 雅雅
△お猶を近ふる月 七百多者
猶の月いろ白ふる一歩 宝庫を出すい力仏と二
不いふ一 保い猶白の市猶ヌウイ とふう
保 六表 ハ墨をかくす 秋の月 城人
僧 月も三五の名ふうれて ふ天
哲 もう山のたう一月の一ひろ 徒ふ
翁 よのあるを風ふぬ月 ヌウエ 木角
雅 翁のおとふく月のふふふ ヌウハ 彫蒙

ムツ 早の猶を見れすあり白桃
キソ ふもたや今きもの弓伝 ヌウエ 杉風
伝 ハ乃ウエ たふ月の秋さ 元代
白保 移宜おりふる寿のよの月 徒子
アヒ 秋の旅の 海広の月 ソラ
翁 光子手ぬいものみれ ロカ
芭帝 ア月も内中 ある水戸の下町 嵐雪
保 一もふ白の おあるヌウエ月 素氏
蓑 ノキヲ義ふられ男所のヌウハ月 邦
猶雪ト 月をふのうこてんをきヌウエ 翁
柳多ハ 柳い秋ふふる月 天垂
白見 アあれを地ふう月の号ヌウエ 笑雪
名色 猶のセふ一秋月てる りフ
芭帝 ナ又ひろけいろ三月の月 沖立
氏二保い巳月九仙の峯之
三冊子 月の宝庫を古年守陽日廿十白より
白ふあるへふ寺夏ふ乗ふ毛ふ妙の風ふる

まゝカ仙い苦くるまー異のおなじ
△月の出るゝ中ゆゝ入れるまゝ次の例まそえよ
異　月ちゝかき上旬の記をり　り牛
△おロ（引上る月　涼ト
七ゝ　うゝくゝと出るゝ出ゝ出ゝの月　賀角
笠　月それて出りを待る日用る　信風
其帝　頃惟の文すゝ一ゝ月　陵き
他後る　ゝ月の月の月の月の月ゝし
△異名月
生世ゝ月五の姪ゝ月ゝイ名い用ぬおと見
人もあゝ物ゝイ名を用るおゝ用ある九之
孔ゝ三度い号をゝく世ま　カ号
去　頃惟乳をゝくすゝ　昌主
コハ女の素孔を用る所以の物なゝれい下巳云
雑ゝい東雲トカ陵トカすゝを枕ゝれい新月
ヒヤむゝさゝい国の姿ゝと忘惟ゝ物トハ
宮ゝゝリイ名の入用陵ゝやくのゝ

義ナ陵の新をのゝ白杜丹　双我
みの　新ゝゝゝき極陵の乳　風之
西桂　桂ゝけちる　ゝ月ゝ　桂夷
冬　ア西南ゝ桂のひの蒼む　時　羽笠
難　久ゝの名ゝ見ゝ母ゝ母ゝ　芳及
夕良　青の照ゝ子の泊き新ゝ　我笑
夏山　ゝるゝの知ちの効乃ゝ　江柘
十七　さゝら之男　陵山陵ゝ　羽之
岸　新ゝゝ桂男の　所て　小枝
フリ　乃ゝゝれぬ之枝ゝ　老九
奈　四の芋ゝ千ゝれゝ八幡奉　ト
天待　立行ゝ見ゝ陵ゝ　乙由
ミ、　九三枝ゝ　杉の陵　山リン
ゝ　ゝゝくゝと乃ゝ　八来
金訪　ゝ月ゝ月ゝ嵐や風や　柘
他異ゝ　因云　隼門ゝ「嫁婦金別
宮の新ゝ古式ゝ用末ゝ　ゝ用ゝ

その姿のおもかげを自ら桂子ひ色の紙もやうる仕をして用れとも其も拵へ

△イ名カ仙ユニ　多仏者

匂　神　ゆかりあるかゆかりあるかの宮辻　翁
ゆかりの田ゆつ手の小方丈　許六
　　秋乃ゆく　さ　嵐雪

芝佛　ちらしの男　秋乃ゆく
　　散るの光ユちの茶ゆく　、

教　ゆかりの舟ユまをかきのもて　キ角
　　ちるとりる海の堅白ゆり　、

文操　秋衣散るの園と行をて　基二
　　ゆかりも花もんのゆ　松如

立之　ゆかりの必飛治の教るれや　阪尺
　　桂男い強一至ゆる　敵　長水

△同他キの月カ仙ユニ　其他キ仏界

芝ゆ古今通式之ゆ勾ユ同他キの月ゆ芝ゆ
　　門麦の孫白ユ子む月を入て　翁
上十　ハ　秋月ユむの宗おちろき　ち　千川

ア　あの山乃樹を入ると月出て　村女
　　叶めきて寺のあるい月とむ　、

孫君　山をやくゆかの宝く寺捉て　角
　　月あの雑のあろくとゆく　、

三百　フ　拵ーやれおきゆんと冬の月　支考
　　枯果て松ゆすんと月のさ　ソセレ

百　ハ　松るあゆの月に伝れ　て　間橋
　　おきつゆむユ月よの女舟　弘花
　　月の宮あ寺ゆろユ悪ゆ　方九

△カ仙三月短句の変格

ヤヤ　月短句ユゆ拵へすぎるゆろに若ゆ寺

▲カ仙ユ短月ニゆ之ニゆ之ユ寺九芝中曲芝
芝芝の曲芝之変格芝ゆ　かゆセぬ伝れとおよう
俳されて出来ー仏又六の芝の変格ゆすきき仏之

名　七時ゆ山を出ゆる　月　翁
奚、　いさりふ仮や焼拵の月　、
　　髪きる寺の月そひきあく　雪

拾

石瑞ゥ一す 孔雀の月 ソラ
碑ニれて象ニの月 信風
多数やる 月の十五夜 素英
ニの西くるの口そむ月 至辰
指きり布ニきき月も仮ラ あ作
奥つむ舟の岸ニる月 辰
月の原ラ〜巳麻の門 キ角
身ニお見てうこねの月 、
炭
ゆうり冷る月の雲ラ コ辰
折し翁ニ雲月ニ翁ニや 仙化
月ラや住む ものの筋人 文リン
読点 ハ
、考ラ丸巳ラを教し 辰巳 飢水
△お後同旅宿の月 多佑省 ㊇
同旅宿の苦〜ラねる同体ハ宜ラ辰
読点 カケ
ニラ月ニ月ラ月 翁
月ラ月ニ小学 仲ラの誘ラ ヤハ
月ラ月のラもラる雲ラ 支考
読点 九

、
ラ引て紙初る月の月 孔ラ
拾 夕月九 ― 二の九の辺 英
夕月九 ― 沢寒九只も吹ラ ウ
原の叶ラ〜 夕くれの月 考
、 夕月をラ〜ラ ラ原ラ山のそ 去来
、 ラの月千ラの月 ― 撲ニ夜来る古 拒 リ牛
炭 ク
十五 沢 ラ〜ラと投原ニ嵐の月沢 ハ
月沢ニ岩ラ岩ラる出 悦 許舟
白 月沢ニ沸る ラの奥のよの中 辰角
、 ラ〜ラと麻ラ風ラ月ニ 辰村
ラ乳を付ラ ラる小の十五 沢 リ由
、 沢ラの中ラ ラ〜ラ ラ〜ラ蕎の月 許去
初茄 教免ラもれラて独ラる月 翁
、 月ラる月をり柿の去ニ ラ
原 月ラて乞食の笠あき月 嵐ニ
饗食 皮剥のお麦ラ喰ラ青の月 翁

桃資　東屋より　西屋の月　松緑
方角　広南より　東の月　、
去　おの月より　侯屋セカ号
おの　葵おおを送るきゐ〳〵の月　ヤ水
義松　月又歩ひ〳〵　ゑの裏未　白之
タヒ　夕月お笠を後より突伝て　ソラ
ヤヘ　あ〳〵まより　おひふ月の新人　糸松
仮人　言悪人より　ゑ伝を又する月とも　母夫
印　反ち絵より　五の月より　コセム
舟人　よりて舟より　月の川まで　義
格　竹皆の実き月の　夕嵐　叩偽
生　協屋の月　巳つる月の　芳　相紫
兼磨　ゑ紫うゑ　ゑを陽す　ゑ月　その
柱　それ〳〵月の出る　杉の枝　間川
他学　伝の月　侯書おの　伝巳　義
亮　末世の　京乃井伝の　月　伝徳
一又良　思〳〵　新い石まる　国の月　似夫

、　白ゑ　沙〳〵　掬集す　月　義
、　ゑ寸　庵衣　侯陛〳〵　独の　月　杉鳳
、　扇伝　ようる月い　雲井より　〳〵　義
武三伝い白匂之カ仙　喜の月　二い又帝氏
次匂　ヲ　稀小伝　五　月の　詰を刻む　、
伝　月　扶　ようる　東金の　伝　、
む掲　文川　ようるや〳〵ある月の　キ角
名　ようしきあの　さやう　祝ふ夫の月　、
神尺条の伝おの　月名　稀月の面アるあり
△古武氏月カ仙
夫　さて伝や三井の　事の　江乃　巳カウ
言低のこそ　言乃山　し　成人
小校考　武不ゑおの　新向い　新成ゑ　向ゑ〳〵　新考
掲杉　天条ある　へく　又中そ　月ゑそ　おゑの　新
宜ゑれとて　夕ゑ　言ゑ　易生ゑ　陸ゑ　月の
神〳〵ゑて　そ一人　ゑ〳〵む〳〵
又乃〳〵ゑ　九乃〳〵の　月さき　カ号

と付きう今一句風情よきある今寸法あり
ちい引上月ゆゑ三生それゆゑ張るゆ雑そ
挙てよきあくさるを安い月みてゝ什さる九
二月を出りう俗ゆ定のゆゑ月出て風景有力
といふ〜故ゆ其奥を勝て挙句を冬ゆ高虎ゆう 文約
▲月い面〜ゆみてえ力仙ゆ尼ゆるを句句後祝の月の
者俗ゆゑ三と定りうされゆ句い光俗ゆゆ
ゆ祝ゆ七く月花ゆゑ上て後祝無ゆ其の時
ゆ句ゆゆて句ゆゆ俗い其俗「義芋」「稿」「長
句ゆ三「七」「稿」「尾」「記」「小」「弓」「ゆ」「挿」「指」「ゆ」〜

月の子付店の柏子等て来る　土新
月むを礼の宮一　田長り　支考
名月の俳ゆ南る実東ワセ　素文
十　投の居さらあるゆてゆん夜の月　義
智ゆの孔せりゆ月の　扶　秀川
おゆひの宮乃俗き秀月　、

秋分り

月ゆゆて句ゆ舟仕ゆき多際　巴丈
ゆゆり句ゆ句ゆる　扶の声　尤次
句句八月の俗い「ゆ」「八」「多」「梅」「宗」「東」「山」「玉」「垂」
ゆゆあり笠松七十二候六月の俗もあり

△新式二月力仙

本式 力仙の時い二花二月ゆゆゆきゆく表の五
句ゆゆ月ゆて祝の七句ゆゆ月秋をするゆ冬ゆの
秋キも切りく扶キの捷句仕ゆ〜扶キの不句ゆ
句時い表ゆ祝ゆ月一ツゆて句苦ゆまきゆゆ
式後笠ゆの人もゆる一丈も本一ゆゆ会釈ゆ
▲矢亨式ゆ俗キ角許六去来くされい三ゆの中
式後笠ゆの人ゆ送云ゆて式ゆ式ゆ
をゆ宮ゆくゆるのくゆて一ゆも義の俗ゆれい
世ゆ句て各間ゆむ支考い元禄八ゆ去来ゆ俗て
後再撰矢亨式の志ゆれいゆを古くやど
享保ゆ式ゆ式ゆ扶キの不句ゆめ時ゆハ

秋不白の時は大方者之を一月出て花を咲
長れば者の三月カ仙は七日に「表の程より花
定まきに表きて者之を花出る時は一の月を
表に出て程の師あきかは一月に程を過て出
又反者の不白を季も拘限者の時は月を
表も出し除減を変は七日に更も赤て者の
舎釈あるしよ形式不毋の仏をいろ
はかは者人の葉も者の力仙と形式交出
熟時は二月和は忍れしまを出拵
のまむ元来力仙は月みるを一の者の者仙
みれとも又一の者て舎は亲ぶく月は連て
季三の人は季の法をある程る古者は毎に
先は変格のさしさるを以の比より季は
三月五の人は形式のに用る加は逆は更門は
力仙は月三日出るを考る人も拵はみ
猶う程移を定法とするも頑之

△形式力仙表は生る月
三、　月ケの横は三ヶむ拵　向　拵風
茎　、月又は仙一本の戸も吹き　禾花
△原氏は月の法
者は途原氏行は始て月の者法あイ力仙は
原氏の中二面を除一和あれは形仙の仙をおす付
いきもあるめ力仙は月ある原氏は月
とかるはイ仙は丈時侍忍付の変拵みむ
やてくれは拵るの人は拵るく
△終季去り月　多仙者
イセ　壁（ウキ）あはあ十形の名有拵　拵加
月を月五は仙はるは仙者月
△月面を備て五去　古今日　㊇
芳を表る　月の度　小技
月ケ月て足て仙度る　月　飲生
印　イ　みるの山は入行のおゝ形　支考
三匹　うつすりとあるは歳日の月の去　行蓬

七月　新月にちの宮　ちろき　ち　千川　夕月に　徒木　約生　海の内　花新

月代のくもり　外故

紙　十田を植て丈田　朧る　夕月　秋　医学

流てゝれゝちゝ　あき月の空　花村

、　フ　夏　ふる　ちゝも　月の　ゝ　と　仏之

イ名他キと　迎る　白去ロ

△月日星　そゝ　二去　古今　八

百物　暑　在　ゝ　打　灯　ゝ　れ　の　月　扇

秋　の　星　の　未　一ツ　ある　支考

三匹　月　まゝ　白　ゝ　ゝ　中　日　の　あ　、

日月　初　の　そ　の　ま　る　ま　ゝ　ま　の　月　水甫

月　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　五朱

新白　花　い　今　星　の　ま　ゝ　吹　持　考

日星

△月に月次三去　李白　多仏省

春夏　月に月次い字去の仏ゝ三白去之

▲仏世月次ある付ゝ仏白ゝ　イ名する扨と

仏白ある人もあり月に白ゝ五去あるを

ゝ又白を帰てゝ二去ゝ浮ゝ仏もあり

七月　旅疲やすきさ月の舟　伯　仏子

後去て庭ゝ発する芳の月　翁

秋　月あき　迎を出る　山乃　一井

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

△ゲツとグワツ二去

名月ニ尺八をそなへ人向む　重之

ゴハ　ゆき京やうとひらく正月　加亮

△卯の月垂ユイ名就不極

和月ゆゑ月の風初て　実卅

夏　月の多さと白ちぬ　源水

ちぢの只うそくとなりてれ　め柳

ゆゑの及ぬ高ゆ　一函

さうくくと栗の秋風　杜良

、　ちりい何くもくて雲ゆむ　天蕉

△青の月垂ユイ名正月就不極

イ

卯一ツ庭て空きゆゑ　義

冬菅　空ユのもくる田上の尾　文卅

背も待ゆ林一ツ　画者

ちりもやはくるそう　ソラ

美の上ニ去ゆ秋の風　琴毋

イ　屋根のうくゆる　移風

芝帝

イ　稲月の柳ひいうゆ中くニ　嵐雪

ゆゑのゆの庭ニいそ　秀孔

くくと姫系や海ニ望む　舟丹

十七

云訳も二月もそまるゆ　新水

初契のゆいうら庭へき　松

神の月舟拾ふ一れうめ

古今五

云月や岩ニきおく嵐山

芝の庭後舎ニ名不方仙のかゆ　はきの五句ノニ

ゆて イ名の月の浮世ゆ　中略　さて花ニ仮名ニかく

ゆニ扶桑の御あれニ二月八月ニ仮名ニ出ゆ

月ニ一字の姿ゆニ　如

▲ニハニ月ニ仮名ニかれぬゆニ当ゆる字形ニ形て

イ名ニ用ーは浮世ゆ　ゆる方ニ正月

ニ付てもよゆ仮ニ御丁の孫ゆ保由庭後舎の

七仮ニ支ゆも交ゆ月垂ニ月ニ去

の許あれ其後の会ニ　ゆる後あるまゆ

△月ニ孤生の形成不極

[古今] 孤生と見侍るとて形ヨイ名の月をつくへ
紙を焼て云事の侍る但孤生ニ品月を付きゝや
▲月ニ孤生形付る成も極まれる事支考の説也
ゝて考へ何方ニく自性れ言の予と云るや

孤　孤生の形ハ弓ん形ゝる　りホ
ゝ侍ゝ侍の人を云ゝ　て形
形の明るゝ月ゝ月　ホ角
孤生とハヤ子の形して　原ト
ゝ侍ゝ序ニ望ハ　ホ　ハ象
夕　九くや十日の月の照ゝ　相之
形の大極ゝ人ニ孤生来て　支考
ゝ侍ゝ　ゝ法　ゝ法
多　ゝ侍て月形を考る人通　小枝
ゝ侍ゝ　ト
ゝ人の柏子ニ月ゝ　考
形ゝ　ト
月の考ゝ形ゝ去ゝて　考

△日次ニ月残不極　古今二去　七月多者
二夜の日日永日和形彩時ゝ侍ゝ時ゝ天象之
二夜の日ニ月ゝ和ゝの七月　瓦峯
実　ゝ月ゝ　大　崩言
月形の形ゝ去ゝ寺月ゝて　、
ゝ戸ニ口ゝ金ゝ月ゝ月ゝ　原ト
実の和ゝ月ゝ　口拾
非の日和ニ山や子ゝ　、
日和　眺望ニ見日の使者の袖ゝて　キ角
キ日　侍ゝきゝ月ニ月ゝ　ト
侍月やきゝ月ゝ　常　、
ゝの考ゝ考ゝ月　考
ゝ　ゝきゝの月ゝ　玄指
ゝ日月て侍ゝ　胡枝
今の世ゝ面ゝ月ゝ　梅光
月の内ゝ月ゝ　七面
月ゝの年ニ永ゝ日　羽盃

忠松の子やすりと夜の月　呑水
地蔵の秋もをき素麺　支考
日用やゝ仏やゝ忘れぬ大工　庄伎
日記　郭公や西の日記の付屋　可竹
苔のさゝくゝ信人の京　考
ひるはゝさゝひの関の茶もあし　指寿
自注日日記の義なり先月を屬するなし
▲日記は月を煙まぬ事い支考仮の御三伝を信
コハ武者こを咎るなり、茶をのるこゝむ
△月は降雨風怨衝新天未越不煙
吉冬五　さ月西ゝ月を煙くるさゝてれまい煙きと
いる年月の妻きもるゝ（きく）如
▲正字い地水降く背西と出る日字西ゝ月を煙
ア　青月西を集てよ〜元上川　義
芳九　岩ゝ岩をつゝ舟　秋　一茶
ル畑いさゝふ岩ゝ月待て　ソラ
ユキ　るをもの指や指ゝ考えて　峯日

一指　如乃指を日も白ゆき　キ命
俗て俗泉を咲ゝ月ゝ　義
浦初る陸そ十秋の月　杉風
ホ　思ゝ　残る　指　洒考
モ　る夜のもゝセ新西く素殖て　ラ
秋の月て時る月のゝ月　季邑
ヤウ　ゝ向てゝ秋の山　貝柴
キリ　岩きゝの中ゝ一もれ丁の声　左白
一屋きの白や月の形ゝ　千山
三千　月冷ゝと口セの松扇　冬月
ミレ　と丁ゝ松の陸ち冷走て　能義
ケモリ　合花あきるゝ歌く西ゝ　神叔
枯　小信ゝ朱て勇つく敷　扇水
扇ゝ風沙さ生ゝ月の考　宋幸
モ　陸りてる雪を嵐の吹やりて　考
指芳　松のあゝを通る公衆亮　弁七
月ゝ子も哀れゝ下陸苦　去来

風
あれくてまいはやくやるる事　雅世
雲の隙をあるる栗の枝　菊
新月拭望て衡近付て　配力
年寄を毒を歩す月の色　光匠
赤くとりきい角力九し　之乃

アヤコ
ヒリ
ている芳名月浮を高る肥お笠　、
先ゴ〜〜使の者てれおて　凉ト
見るよ〜〜ぬ所人をえる　林角
和のむ〜あ〜この月の何やら　栄友
阪志ひを内衆の出るるこの月　尚白
和志う機をえて男〜扶　回亮

枯
カラリ
憐をき憐格るの岩　芝柏
久〜〜その者る古々の者乃月　教之

市尾
カケ
恨宴許を一拭きく秋　サウ
知する二人の新のやをく　キ柳

衡
八寄
衡舟夕阪男あるめおて　母秋
少あ拭き　振の夕れ　、

お初の良五〜〜月を　葉桂
久えの中〜発を月をえて　一待
怪ま〜〜和も　蓋　茨　亦木
松杉の白を出の陸ことり　赤竹
ゆきれ今時初て　林廉

泉
角力自怪を角力ことり　行泉
巴丸い病もまて　如風

天キ
茨原ま芳る白　天氣　合
枯
年の怪いて〜〜　昌房
すむ月の横を懐れぬ横田川　拾芝
あやつ〜の音色を至てん天氣　胡故
そそも大方むのち〜〜　左左

彩白
月拭まる周る　水甫
文考

イウマ
枯白
発行〜わて〜怪の拾き　義
拭の明と拭侍す自　独広
嵐て雪を今る月二ウ　城人
松泊

他

杖を拾ひ　宮等の事　江山
稲妻あり時々　社泊れて　箱
東北　稲妻雷光を天象と嫌まとや不富の位と
用へきや但今式の乃位と保へきや
▲古式と稲妻雷雨天象序雖りも支考のこと
△月と同時分幾不姪
一方い時分一方い新を云とせい同時分姪寺
又時不定のおとくむ時い刃方時分を云て作
てもよ一位ちいさと一ハ考ちいるもいるるしたし
●九畑いさと一世月待て　ソラ
雲尤　アとを向う　来のもと乃　川水
●年のみうん魔む夕るれ　一栄
●秋もやくなきうき　き拾ゲ　イ鼓
雑有　丁よう魔の事う来てある　世明
ケ抱ひて杖山魔きあり　支考
●空中い糸つく考と考うり　正木
橋山　故を子くて出る源多　みち

ケ夕表のそうあひめる月のこ　邦至
●入おを見くい秋のもをを　まを
白の位ちく　魔の考州　杖風
ケまち雪みふの世と月出て　、
●あの杜とそう雪考うり　紫都
待うて見る関のおだん　石橋
笠　●空きく行とまれるこの月　祇山
●杏という一を　杏奉仮寺　明豊
今の名ときりのまれる考一ツ　柏水
ケ星の傷を見る　乃ひ　白柏
△月待月祭い正月のこ　八
立待居待の祭い待字と日祭月祭の祭い祭字
とマ沢りの約マチ乗れい沖祇く待考ある方とも正の
月知位と待る考と乃
△日と月　対句
柏望　日のこる傷ると笠の秋天て　牧童
丁南こう　東の　月　松碌

八夕　夕日ニ拾ふ屋の情　牧　昌拘
山里乃月ニと年引捨て　和什
李山　間や桔ニ日のそる　隆　上　西久
咲くくくつく　弓法の出　玉吹
武蔵方いおニ表れす新風新味なぬ拾さする之

△月次九月を書き月を分る無言

新百　帷子もひまるめる八九月　支考
月い十五夜十三夜　月　仄止
反操　囲。三月七日と呂やれ　乙由
みのもむもんのこ〻ろ　枕如
呉葉　芋栗と伸ひ分て八九月　何声
詰も新米も今年一粒　雅く
名匠　菓の子代もこ〻呼九月を　蓬龍
こ〻ニ和歌をさそ〻みの　宇北
百石　みのを。花や柳ニ遠面　蓬睦
和月八くをまつねもんそ　天雲
十三夜い言ぐ菓も艾名称　甚二

木のそ〻ニ和歌の文面る也月　山りン
△月ニ和歌の付
和歌新ニ和作を附する時ハ先ハ名ハ京式
ハ誠ニ成れと文ハもて分る時ハ
月みの呂月ト分る子細あれと詠こ〻く
分むも拙々むも呂法結ヤれぬ拾ハ
一格　拾和歌和学流く流派て　コ歌
京乃月　和ハ悟踊ハ　羽
山琴　村雲ニと者の月も　拾　お　岩ハ
ハ雲ニ雪りニもこ〻ハ　秋房
李巷　菩陸る西い法佐さゞの　月　拔不
ニ〻ろを詠みニ出るさを無　栄支
呂帳　学文ハ眼をさ〻ニ月の下　原ト
和歌の上を口ハる　通天　小
羽　和のあるとニ月とハ月　末角
きり陸く寿きあ歌る言葉ニ　拾りン
コハ和て法結の説ン

△月に雲稲妻花火の付

[ウヤモ]月に雲を結又雲を付るに雲を称
雲のおもあるに雲を育て月を押れぬ様さて

雲張に雲に枝のそえより
孫のさりむのすしさを月

嘉 川舟の猪に雲を引上て ソラ
祢のこ〳〵あるこゝに月 祢雪
壬 叫の陸傷の月も晴こり 式こ
鶴寿に舟てきおこ口こ村コ
低 蔭にさこるこゝの鶴寿 低水
西行の像を和する間の月 家低
さこ民 花火灯しこて星こる こ 箱
故博こ横の中こ袖の月 立ホ
三年 鶴こ猪も雨井こもヒホ セリ
月の梦に一まけの 寿 芭二

△月に関路西雲を荻八郎世の付
関西郭晦に月をきあに雲を月を広モこ張て

分むこに雲この法あり肌字月に只月字を入る
のこあれに手陸古ひ寺親お月に二文の巧拙あり
毋月去末月に古こに雲て用これに一変の
二文あり内諸肖付に二段こ分これて化社
に陸れお彩をこあこるあの

やへ 関のおりこる面構の言 去末
伊 祢こりおこ月の新人 京松
名 雲に関居あに雲の松 万祖
ま 月こむこその草紙こむ 白風
東花 月おも花に関の雲花 を お
面に月あに彩こ雲の言 数水
雲 居ここうこ叶の面の言 ヤハ
伊 入舟つく月の云月 り年
山下 名月の居こうくこ岑の松 性白
一作佐 杖のりきを陸こ一面 方堅
雪尤 雪に陸寺 新の本来 ソラ
新 そこるある月に二あり陸こう 松風

奈山　川きりの立まよひ山のうらうへ　芳船
未訳　月ニようしひ　面影の雲ゝ　月の夜更ふ　支梅
宵　月の夜更ふ　あのさん　雲ゝ　林和結　徒若
あ〜　月の上の雲ゝ　雲ゝ　残人
去　月のを　月あき雲の門おくあけ　蓬
毋　日和ゝ味の外ゝ　式拉
八考　弱木もうき月ニのもの上　池柳
未　雑師ていもの八形　キ角
あ〜
未訳　月ニ不改橋を脚ちや
比　ゝ今もの雲を月訳拉
△七夕ニ月の外
宮台　星合ニ月を分る天のあ月に雲く星に独
名も一度の夜河原の月に逢ゝて　文的

一字　雲引ゝ　星の面影　似去
あ〜ゝ天の戸ゝの雲の月　義
天円　星ニ星ニ文ゝ八の訳　百阿
おの哀を月に吹　花フ
寄　七夕ゝ月に行　依曲
毋変　ニ秋ニ隔ゝ月も行　南お
物　契る雲の星の使ゝ　八キリ
、　乃ゝ入ゝ月　乙由
、　夫乗ニ一夜の　蓬
月に山の梅雪　万り
、　雲の中に住て星の出る　原ト
、　張る星ニ月の月ケ
△月蝕を用る世言
義　秋をめ〜ゝ　雲の月蝕　沾未
コ人　月蝕の元て天中に月の表　許云
面をう〜ゝ雲を恨む月ゝ人の涙ゝ
ゝ月ゝ蝕を解ゝ義の才丁才蛍

も恋人の心をさそふる母てする考慮あるし

△月の名称の分　多作者

[中古] 月の更科花のようのみを分毋〜るみられ
宮原の東武田の更科と分毋〜るみられ
情こゝろの余あるの余あるあり

[古今] 古式の月の更科の分毋を題て詠て詠
分毋を婚すれと公法の今の用のあり
▲蓬門のおをそ〜るの分の更科の更科と分又
お毋を居宅〜に詠み〜ちいさ亟園子分
ても許さ寺ウヤムヤの法の古式あれい法乃寺園
の考の式考の分を一ヶ条ふ〜〜られて分毋
数多あり古式のお柄法を勘破さもむみ〜
一　足毋を詠れの足まに次ケ秋　翁
桂の帆拒十分の月　巳友
次ケを秋志がみ〜ら伏足る笠　似去
あの〜の浦さ原て月　友

木祇の〜〜る高祇の考　翁
社の森や古〜の森て原の月　杉風
△月の名称て考て花の月
更科や星るといふ花の月
[中古] 月の名称の人表に花て月のんを作るあり
矢法の行帆作る毒く更法を毒花て月を
拒る体の作れ〜ケ一表てする分に表の月　桂
男婦家の形ケて作る〜　始
▲イ名を用く古式のさ〜〜只正の月てさ〜
お月の月祇の星の分て考〜又月といすて
月の形容ある時にお月の月を及す
△お毋より月を云る蛇名
[古今] さてお毋より月を云るくとん
拒陰日の陰より和代の陰れ初
玉の光乃ケ乃考考ち　お
[宝定] あ〜〜の芋ちくくと美好乃
と考の月の名称原あ〜

されいおのようにいふる月において歌句をちるに
及すあるてにおのの時すて月にあるとすきと
▲月をおよそ云くにいい義も法門人も仏か
き新に天之宮住城に日星あるかて仏法あ
らに百るむに越に日次あれるをやせるに仏
を柄に者をを分る務之全日次に月を嫌て去
ありとあるあるに仏のお法に歌句より云
ふる月トのに出るるて去るーさるを世
仏法と三国に天ふて日次に月城を嫌「月
をあすに付に毎に云るを天初月に只月とる
いるーに五も法句にすトに法るに実止の
るに仏のお倍を再用に付に先人の柄
を歌に仏より已下言る条に吉凶の有るに
法すに遠城を天に京お八条月大方ちう

廿二　歌人て出る男雄の山のに

月に嫌ーとるるーむ

は天付方の一件に彼て歌句の全体に月を
云るる句法にあ仏雄の男振に廿おに用みて
仏に句の法向れる山のもの古語を仮て次の月
に云るるに宮に仏句の付言の嫌とる人毎に是
ちむ山のに出る杖のに月にある言の裁入に月
にるるに嫌ーの歌部の句法に
▲八古言仏法に仏に法て月の法にあるに仏
に変万化に歌仏も用るに教て古法れめに
歌物換言に句法を用るに多人者に
るるーに仏を天法に用てに柄おー

△月にるるおくにるる出る

廿三　ちるーにるる月の法
不の法にるるに月の仏
を手にれの乳の法に永ーー
言性の言に有る去月
彼に歌月に月次日次の技合に字を嫌に仏に乳

と云て又星の掟合に拘らず二の字の字あるを作る
常用を以て二の字の字あるを作る
も云へども是にもあらず
▲氏文も月次を正月に始るまゝ掟を参ひと古式
の釈分三去きりて出れと其の釈分二去に
しるに二の色に夜分就の変格ある自徒を以て
れて支考の文に出るあやう多し但氏記録の
月の自徒を挙るに義まあき作例あれに
常月の名に依て月の自生を知めむ
されに氏記を常月の法とするもあれ又
「おの〳〵月ト数るに おの云る月に
に云尾七〳〵掟葉の掟拍に但氏仍に義の
「文月の一変格あれに奇文に合て十二再生り
以上 干あを忘て考に めとり
門に立て只ふ月の釈
氏付方に姿情の南にして干あと云の釈を

又云〳〵却て数月の付方に云るもそこ〳〵も
二百万の乃至あれに多く情の宜とあめと氏記に
姿の徒句とし〳〵拍今又氏系にて お屋二系の
氏仍と表に文金に仍の干変万化云〳〵
▲氏結文に今とあに氏系をもてみ変万化せと
に云れ必氏仍を氏仍に拍字するもあれ

△原月の変格

㊀

句 ㋐ 青字にあゝる神の宮辺 義
わゝり萩の風そゝきころ 許去
八月に掟面白き小掟 移 酒生

本氏 青字に月に付て〳〵おゝ残に附にあ〳〵
に乱あに氏に変金あれに云句のに月を拍せ云
八月の月字にて又原の月字に金釈ひる
生を付の設とし〳〵青字る を月と云ふ
三百に入金て月字の御と云る
定 陸日青字と云百に月にあるを

月ニすすしと秋を対出す八月とく月次を出
せり今八月実敬ニあたる仏の庚定之月秋の
坊ニ生ぜる寄る出れいそゑまの御もおられ
毎度寄寄陸寄の月ニ分てをうゝゑるく
[吉五] 寄寄の萩ニ兵今の月の仏を合せて月と立
寄ニ古法を持さる寄くゝ加仙ニ花二百の失兆
とひきく弟子の妙用といふきく拾ゝ式
寄の仏ニ加の変更あむニ家門の学
去る一人二人い去来天命 ヤ仏ヨ云 少法て寄寄をゝ
も月ゝとゝ寄る所乃の虚庵に只門人ニ教
てゐ冊の寄へきい法 河のさゝゝ
▲三云曰寄ゝ寄寄い月あくゝゝ寄法ゝ
式仏ゝ月ゝめゝ月ゝめゝさて上文ニ加仙二百
の先兆に式を立ひと立ニ拾ゝ論ゝ
あゝ兆を二月の先兆といくス状あむ
[八十医] 風ゝ今ニ寄寄の白出ス去来日失所敬ニ

式を立ゝゝゝ上いた法ニおむと兆を月ニ用
仕る式仏法六の去を又ニ向言寄寄を月と
去ゝ立れみゝのゝく拾を仏のれもあく
月ニ用ゝあさまゝきゝくとあゝ式ゝ法て
ゐゝ法守法六い除川の会待ゝいを拾ゝ用あ
▲陽あゝ去来亦ニを外ニ示てゐ冊の敬を
和ゝ吋ニ式人向日今差宮法ニ寄寄ゝ出て
や仏差白ゝい敬ニて商きお得ゝて仏李
ゝゝ月をモニ又向文寄寄を月ニもむと
いもくやゝ又言和の仏を写さい去来ニ弁て
又孤ゐむ文白ニ方て一変格あむいえむ今兆を
後いて文も赤柏とあゝむ初て一変の仏い古法
を拾守ロ大兆を立て後吋ニ除てするゝそゝ
因ニ和の疫お歌い文去許支の仏ゝと湖東向
言ニいゝニ連守そゝ中去来法六いく和の
ニを停式れニ和の意みて寄ゝゝ取拾守

支考の翁の今云と以て支考を今おもす
て云ふ文芸第二位にあらず自己の之を除く
除すと云ふ也て芳を省ぬ矣あり キ角にその
中にて両は両失あり又変格に自立あるい本因
キ角支考涼菊の位子に位に人に故也寺

秋さむや彩ゆの星まるく 知七
もりとるる杉の葉 素行
焼捨の苅に残る袖めれて 支考

西巻

[吉五] 祖日の稲に除て月いもむろく 惰て考えに
星白に拾あくさて六句表に位句を月を出
あすてきにあるくい宴に焼捨の名を仮て月の侍
を今るこさりや青のを花といひ文科を月といそ
むに位に月むにあすといそむ惰て句を因
毎えあるる山田の形容を移せさむやさろふ
ろ〳〵ろる青のといひ文科と云て月花を
位すに位あれとおのろ〳〵ろ〳〵ぬ〳〵

位者の眼力を与るべきく
▲コハ六句の位月を一変セ一変キ格の位と比位
それての変格の位を祇こ変あ句に移ぬ
付に移のすあるむ位上又に「六句表に位句を
ちあすにあすに自賛の公仲く月に与ノを
位ろ一又に表に六句あイて八句に移も [吉今移]
ろに「もろく移の表に移の表ト月に国紀の矢く
ナ 鶏さ〜と鳴と呼て寺家 キ角
屋をふるそふる忍ち鶏衣 、
位 位を考へて忍の山を山をさ〜われ 楓子
ア 四月の門へいさ生ろむ 角
、 国栗と呼られよ花の母 子
西花集に文祢土位尾楽に同花の出板あれと
位を俳に同付く云に江戸生涯と陣て同仲る
毎キ格位月の仮あに考へコハ二ま位に花格の
月山に月を拾セ一位ふ月に月付一変格あれる

姿拵の奇は三笠の山を初トスるい五ニナ初の
才の冥合を佐字ニて名伝ニ月を隠すたい様
これい式箇をたゝすーて文ニ一路を又発ヘー

△月次ニ月ニ対セ一変格　八

式隠ニおゝ矢ヲ白面の月字ニ文教を隠ゝう
ちゝ　又月やちゝも方のおゝ似寄　弱
ちゝは　方をの方ニ月の一ふ　た栗
あきゝうニ仮ゝく　烟　ち分て　ソラ
式表ニ月ヲ梅すゝ方のおゝ似寄は相合
大宮の朗詠ニ月老い白中ニ隠れ月字ハ白
ニ歌これ二句五隠ニ月とセ一あむ○七ア大法
古ゝ他世奇を引て作ゝい非ス

花拵　篠を表ある拵の法　四入
八ツ口山　月山の方の月を号ゝむ　ラ
注　張名多ヲ矢形る移書の教　梨水
熟二ヲを表ゝ隠ニ名ホヲ七八ゝ又名ホの

ありきゝ月ニ月ゝ方ヲ者メニ注をの白出ゝ字注は
名伝の母は方白は月ホ柄は文序は並ニの月垂ニ
の名知を付むゝ月山ゝ月を分て月をあゝニ
表ゝ守と字ニ後ゝの世を成ゝむ月山月の山
ニ古弄多一式句式序を去ゝ月ホをゝて又ゝ
強ゝ方ニ人ゝ山ゝ「多の弄ニ隠ゝむの
注ト白の表ニ接拵ゝう楚ゝ方ニ左変の法
あるゝ古式のイ名ゝを用ゝる

金玉集　古き連弄ニ月とゝて月白ゝき表ゝ
月付の変ニ方ニ昌隠の云ゝ
▲連況ゝ方ゝあゝむ義の仮ニ文尸ニ月の説を入
れい注之称ゝう只ゝ月ニ月ニ方ニ

再出　ゝれい記の絵ニ部ゝ

まゝ付の方ニ月の方ゝ月

吉冬五　背ゝ高付の七月のゝ月ゝとある方の注ゝあれい年
ニ出絵の歌付ニて白情い孤の一字ニ云ゝ方ゝ式

句の移すべき行平業平の名きゝあくまで
と座居の徒門にて考の徒弟を加合る月の
俤に交まして文久の冥合に神ゆとゝもいまし

▲六文月の一変格にて外来の月に光を色る説く
おの月と式条に三変格の事をとくに式そのゆゑ
今の学者に白を乃をめむ学んとゝ
拾月花の説とゝむに九条あり月に八条あれと
一字も自己の乃理をとゝあり其他に除其者に使て
俤の不乃止とゝる変理の拾の変面に数に為て為
多の人みて者を好拾を求むとて使に月花を
数人々自月むいまし神学の礼用にて俤乃
和すべく俤の言すべく俤に大和の名論あるとゝ
▲三月花のお語法を世古今拾の学者説を考す
して二者の月むの句に言正月の恒れに仰られい
さて拾き記をお月に乃ゆ多連或に言る
月に三通に立て只世作の徒云を正風体とゝひ

或に月花の拾に除む毎に変に歩と教学に反て
月花に句に拾拾を考す拾に者の中にて変化の
故とめて去姫を年にお月巻に式乃に古今お八九
条の月むに八体の変法を説く弱学の能やゆ
多に使句にて考と仰の拾に大仰の学に人に
孤引に考に大拾の大仰ゆむ

□非月お月に外句も我も不姫
日乃乃行灯乃乃意行者・考号ゆ
八考 句 考仰日を乃に考る 考 丈木
忘人も帳に仰に月考 可為
日を拾乃に八月みゆ乃に考に又秋に考に
意学に夜の月を考に日月に去乃に学に
白河 去れ灯の学き乃 乃 俤化
り灯 考拾の拾に月考と白に合 支考
考乃に使り行の乃乃 山学
考 乃も記て学に考る 只艸
拾学 考に考に考て我る月の色 巴兮

反　　影うつく　ぜ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　失故

芋ゑ月もやうやう　ゆ　ゆ

柏白　行きの後をよそそ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

三月カ仙と秋武の形を見て表号ヲ立の
月を分て四ツ武と名付すべきなり

星月ヨ年離 芭蕉式ニ皇月秋 松ノ月ニあす発
白ニ出て名付ケ三白去て イ名の月あり〜〜
ケ今も皇月ニ秋ノ月の字三白去とあり 和
も月秋も赤印月のみき秋和ちの彩白ぬよ
して月名付ニ形るを以て 他ニ月ニあぬ〜〜 始

吉五 次ニ皇月秋の俳句あり是ハ秋て月ニあた
雪猫才ニて ニ式名月あり其三白ハス秋ニ
あてもあの月 花ニ他事ニて イ名ニすべ〜〜

▲皇月秋名ニあハ号メ事ニあハ七白メ名
こ云ても三去て他キの月出て〜〜イ名ニ及す
但皇月秋ニ他キを結ハ他ニあるべ

注ハ 拾年四〜〜年の月とも いフ
注ア 月肉ニ 匿ふ 皇月秋 嵐ヲ
注十 孫の 赤ニて四る 名の月 嵐ヲ

一

注ハ 約まる 注ア 赤ハ 九 赤ハ 九 秋ハ 九 おき 結乃 別ニ 和 義

皇月 ハ 酒 西る 雪や 中牛の 皇月秋 系松
注ア 炉ハ 三 炉ハ 三 秋の 新の 謡声 北之
三去の 伝おれと 古今通式ニ イ名ニ及めす
月次月日の伝ニる四ツ 又月芽ハ正字 跳躍
月毛 約ハ正字 解 あれハ月の 残も 煩ぬ 中五 老ニ
ニ

□素秋 白ニて も 一

三冊子 西日ス秋の 中ニ西 方ニ 西 月ニる
▲ス三ニて ニ日皇月次閑 西 翔晦 ある 附ス秋
て 閑き 三 結ニて 他キの月 する 中 方ニ 又 侍
あて も 月 出ハて ス秋ニ する も 方ニ 位ハ
六白表の 中ニて 日皇 あ ハ 白メニ 六白メニて 他キの
月ニ 出 稲ニ 月次 あ ハ 六白メニナ〜〜キニ
あ 付ハ 白メニ 垂の 秋 一 加仙て ス去 生る
四ハ ス秋 決て も 守 白メニ ス去 ス秋 一つ ハ

△寺三て聞る又秋　多仏者

義の振くさそのむ所〜や　カラ

おくや拂ひ後の寺木　為指

七夕の八〜おのきひ〜くて　義

△又秋三句　△サハリノ下

百万引菜の海に菜の白々か　限化

ひよ色のそく宗の狗林　和

白扇キクナ紙ノ内　又一　自判する法〜秋を憚て　支考

町毎の夷や菜て明る夜　呂風

旅〜よそ〜〜多寄の秋　萩人

又二　掃〜ものたり角力の関を　冨考

因除しいれて〜〜〜のきく　詩徒

又三　小神と敷き　萩の一枝　化

厂の声あ〜〜の七夕日のみちて　風

又四　竹伊〜〜寄あ〜くしきくのむ　和

菜〜〜〜〜伊の　考

中仏を伊丹の絮〜れまて　人

菜の日や三浦の秋又伊丹や

又六　笠〜〜秋と〜る草〜　考

、　拾〜〜秋神の秋の秋重て　和

九〜を秋の服やきくのむ　東拙

秋九内　又三　〜〜〜〜

三お

衣うち分を解ねュ吹くかりて　甫山
杖ュうやそそ萩の上さより　杉支
垣の新のむも実を拾　阿翠
郭座位の路ひひ人の多ちをて　去保
月ュあるぬちもれ寄る志賀川　李仙
川寄角〳〵きき庫の寄　芝二
杖ュ以名ュ風さ実の入て　伯掘

多行者

△又杖の老

丁〻や雪ュ乃ある帆を舟　有巳
芳雪も年〻八系の杖　二
船さき俤も若尤も保干ュ　和荊
笛を吹ュいさと拾ふの月　芝扑

三十
立表

他

△掘兎ュ寄や初杖の日南ゞ　去来
苟ゝ〳〵〳〵帽子の紙　義
小打をさそ尤萩ュ打ュて　口通
二通寄ュ今る拾月拾　イ紙
△又月や丁もいろは未老寺　嵐枝

文月

新月

月初すめ〻拾〻きもれて　阿的
きもれるの寄ヒイウ〻の影　白拾
月仮ュ行る萩の寄角ぶ　吾仲
柳ュ寄る中ュ寄も叶る也　山只
山荷の孫をお人ュ影拾て　花フ
笹〻人ュ〻〻ひの関の行　枝

△世俗寄拾下の人〻文月芒月末の句を正の月ュ形ュて拾ュ寄影の影字影字を分る月あ〻ュ〻〻日の月氏拾の月氏字〻〻一句ュ影を猪ュ〻拾ュ並て二世の目某ュ文路仏人の仕出ひさうちや字ュ支考の法を入て二門の人〻契を止ュさて〻名月ある用ある流

△又秋中ュ出る曲言

東三二ュ考の法式ュ又夫〻あれと又杖のあき月の八面ュ〻そ〻れ〻寄ュ〻キの俤もやそ〻き名〻

カイ印 巳

▲かくいろくの面しの月を落杖まする付の法之
巻之八 句摘之他きの月出さる付表之スキをする事
▲他きの月出てスキあるも又おなじあるもあり
[宋] スキのあい古来も待あるを秘之方の月まるる又
之面之杖の乃呉を付ること去杖の名称へ
▲コハ古式之蕉門之文さしてあきらの法るえ考へ
其方の月く方杖面之事を除てスキをつけ
あい杖之引れて弱そく初てスキの法るまし
又スキ杖と他きの月と持く之張るもの又他きの月
出てスキあきい方のるるく

根岸

ナ ロキ 青月絵ま苔をえちす新月 菊
ア 杉風の性多名侍家ろく て 嵐雪
ア 因斎の杖を傳ふ明るき キ角
ハ 門之の森鳥之手む月を入て 菊
ア ちきもき初るお裁の杖 宗波

杖風ー蕉之ろく 祖徠 式部
もしも面杖の月見ちるる 陸子
杖之ろく 猪の方を下まる 千川
○ウ考の月之今を干て五世 在字
ろよ西瓜をつけて面く 菊森
杖之ろく 未年之屋れて 菊
スキの中を賀今の作之ろう 森
長之之之ろう 下ま 乙孝
梅雨あの光て来れ重投て 一有

一帥

仁生祝の月出乃生之宝在のあ之スキ杖生ろう

仁吉 六句

陽て面くをの之ちを冬の月 その
紐の生てり之杖ろ因まる 嵐竹
冬ちきりて考をかて寺 吉原

東老 八句

冬の月白ー乃ちり梅花 乙由
三考の之ろ月いの考る 水甫
ケ冬ろいあとよまれ 冬おもを 仄止
ちて之ろいの 杖風 季嵐

東山
公

徒月おのづからあらはれて又りて木因
あるひとそれの面白き枝木面
梅花弟の木細や 追 蕪 遠
佐夕 きそれ吋る初りむ 夕

△百匂ユス去二ス枝一生る変格
スハ 浮るる 初ユ 変むる百佐し 麋 樹
一花さて〜二まん山 吹 手去
風の重ヒ三度の花を わ〜て ト尺
滝 堅 去 の 百 さひそめく 吹 定
嵐 文 彼 ナ 矢 浮 る 去 す 〜 去
遣 の 捲 ー 候 為 ひ る 樹
アア 打 琴 の 変 苔 上 ト ユ 出 た て 、
博 ら ー 夫 の 密 樹 就 る 嵐 シ
武 ト ユ 大 あ て の 梅 美 生 ら り 峡 水

□日ユ 俳 徘 風 酒 照 天 気 我 不 痴

任非茂 天象ハ月日星のごく徘おあを痴ね
む色 熟 の 人 百 ユ 文 れ る 人 佐 ユ 痴 さ る て 〜 但

秀の歌ユ天象とみて書き景面考月星おさよ又
字芸の乳押門ユ徘俳風ホを属する吉痴の伊
俳ユあされハ門部を考ハ孫ふるあれ始
考ハ百ユ代ふる丁 嵐 弁
夜ハ 梯ハ ハ る の 宝 ハ て 義
ち え 州 焼 る 乃 の き ハ る 面 ホ コ ン
書 面
ひ ハ て 一 ツ 初 の 面 百 ま
英 刈
氏 宮 の 絵 る ユ 旅 の 位 あ れ て 支 考
社 の 下 ロ く あ ユ 日 の さ た 牧 堂
テ ア
考 て ユ 文 を ー る 照 俳 考
おれる 弟 ユ ま ま く 梅 の 考 人 義
読 九
お 仏 の 白 く 夕 日 さ ー む 曲 翠
平 畔 ア 菜 を 為 ち ー 芸 記 考
秋 風 俳 る 門 の 居 ふ ろ イ 弦
月
杉 ユ 並 て 隠 ユ 日 の て る 蓑 生
ヤワ
ア ア の お い ん ア く く と 技 堂
サユ
酒 久 ま と や 入 お を つ く 宇 中

冬 ○冬の雪の去門の去杖去て 洒掌
保 雪工折るむ一もの 清 支梁
西りるむい雪のまち 梁 也竹
夕日のあく折工考も 為曰
もおりておれ人の花 成 不柳
秀の冬く 山吹のれ 笑ふ
秋 冬人 天 すむ水う天の降る杖のれ 除妙
天 花落 小も南も 沾おりり水
居眠一五の月傾工笑枕て 汚言
△日工月次秋不姪 古八云 古下及多者 加行
夏 ちある警の幸の去日月 支考
徒木工おろ寸因移の 後 行
育 おき出の葉を千ちに育工 柯白
出る日工吹て入る日工むの幸 杞考
ひとの角を西寸孫鳴る 白杜
正月を毛の生るを行五 隆吾
何くそんしても わんぱ月

白多 ○法の降ろうを読みく 小枝
西日さーしむ寒の沼て 考
義のありく日いるとや 玉ラン
翔よりも五工あき花 ん 甫杖
さくれ山の杜の三月 考白
さく
△日 三去
枯 夏向も世工の隣の日を夏て 扮水
日工原て宮木の屑に庇工打 佑徒
村西工日い照あく冬の月 考
秋 乙冬も日和を冬るきのれ 小
冬梅 ○雪に咲ちきれて西工日のろう り和
梅工 梅工 ろけも 永き日 左玉
△日工日次 二去 ○
畠の川乃日工てれみる 及朱
春 三束の日の木俣五工咲英杜 固友
雪工九うる 去工 日のあ 千中
夏 教まれて寿の寒去い日も永く 氏杜

△目之吉の日次我不極　多有

白仙　妙ゑて〳〵ロロ　天蚕
高う先よの中の大ゑまて　無風
ふるうて〳〵ロロ日の時てゐる　蚕
月おそ残之勝負をきて〳〵めも同〳〵

△日次　二去

冬　物稲之栗を先之日のそれ　力与
実の日の旦きうだのそく記て　義
ロろれて〳〵い　又四ろう　之　由俗
り柿　ひよをの日庚之時の新之糸　五相
日庚まもあ〳〵大工之ろう　甚二
笠　四ろの日之冥出〳〵　誘いろう　り石
庚之さく　拾ひの　拾日　石常
冬柄　五〳〵の永さも冬の一日花　五吉
五月　反の日和の庚〳〵　庚之〳〵まる　嵐七
枝実の冬ろもきろ日庚ろも　世秋

△教字日次　二去

白仙　枕もまやちく古ろる之れの月　三姫
情の保ん　百日の宿　蚕
り柿　ろ〳〵まあけ寸禾い　一俵　涼ト
姫松の住吉俗　十三　教　住行
月間　ろ月之まむの寸教れて　松之
式時〳〵も　大と　ロろ〳〵　郷望

△日次之地名月日是我不極

ホシ　保軍之星涼之ろ〳〵　苹　松　舎莊
商　物をろれ也く　俗能の声　知之
俗之ろ日い我文めて〳〵て　あ住
白ろ　ろ日庚之四しの物末　小枝
日　ち教之成之白ろてゐろ得　教之
日世ろ〳〵　苹ろふまおり一反　ろろ
楽名ろ〳〵之て日永の世みれ　物コ
月　冬物の之れろ俗もあく　物冠
庚物之日和をりろの　拾　物的
コハイ件字去の保もあ寸指字の教もあ住日次の

文字い多用そて殊ニ重畳もおき所そて字ニ字
の仮ニ数り多用そる事畳見る字い嫌くり
其ろニ当る一種る通の法式変ニ当るく〜

△日ニ久ク付句　多者
はるるいまれてくるのち　糸　木琴
依法摘み日和ありくり　徐才

東花

△日ニきのくに寺野時栽不種
式歌日字き書る日のんの〜　昔種　今種　拙文未考
別立別歌のんあれ日字ニ嫌す

山下

稀無ニれくの高高荒れる　香静
たくをすい付るみく　文和
法摘み日和ニ舟のさ〜合て　野寺

三匹

きのくいるをくる接人　打蓬
杉系ニ花を除て　椒の花　蓬
入る日のくるつ〜ふと乙る　茅

杞

日やけるくるる　傍ふ出り　和
あるるの先くる　俳　仮　傍柔

朝日い和和るあ　南吉
△時ク〜各面去
茶ちくり春てくる孫ろ　支考
るくくして〜るみる庵　杞りし
秋又の白ろ　ろて野　古之
岁　ちるくりやくる　肥合　白粒
恨　花保行ニ出て花の変拙　密水
紫すきのくの付ニ一花　可及
ろて又松系ニ面る花れて　夏葵
焼　ちくちくの春の高さ　祇徒
杖　ろの用気の床の生花　和楚
むくくり時の天気を交合て　伯楓
△同作の日和去
低　ア廿日　ちくり和日さくく升格子　恨化
ちくく和日のむく横さ　義
さく　以水舟ニとい元作さく日和ル　玉風
日和　日和ち作のつろめ　考空　根桂

辰　ウ　方の日　雲　山　吹の　ひる　和名
見レ　ふ一人の　夫の日　雲もとつく　山之
雑　ゆ　ふ守　拍子の　松の　和月子　彫業
日月ア　去日子　月ふ　ふ　ふ　雲　雲　雲

法師の書く杖なるも書くべし　或い「花やうの花」の間
も抜式も抜あれい古抜も胡乱のさまあれも
正花の法まで及ぶべし（非正花下に注ス）或い「春の花色とも」
間も春のむの続もあり　（非正花下に注ス）　中略　或成立
似て今の仏法の弱もあり　（非正花下に注ス）　略　月もむも昔の間のあや有れと今の姿の法と書き
但し旧式の一法は法のむも嫁のむも書きて
抜あるあるべきや一日の法は嫁のむれと今の家
家の式目は一段万通の技を分れ更そのまをして
大き宮寺殿と書きて抜あと決す
（享三）今の連歌は花の限り正花は
あるべきと京今の連式にて法あるべし抜は白るの
歌仮は同歌のむも仏のむも好き歌更の嫁
あれ法あるべし正花は一名と古式は特伝の格
あれさるべき古式は仏すべきや抜の花抜も「花
ゑるべきのむと書き先段の書も

ある一名と草木のあい名を花とも咲く正花とする
及べと抜式は云抜て今の正花法は更さ
命は法名は白るは花の法は故義も採用
実抜して書く一法の底段を許さず数一世の底
法を伺ひ書く万年の時堂を作るべ一日を
ゑるも正むのるは京今を伺て分おす
（星月）雑上及時支月は咲キは花の咲キはあるべ
と支月はあき花の咲き花は五月
もあり雑のむも抜あるべ　花あるべ
付ざるあり支れい人とあれ花の三月あと
ゑス表連て支次支命の抜あるべ花あと続
求る付支れの花雑のむはあるべいるするべ
や抜あも月キも花合て花あるべやむきや式
あるべ雑むも非抜あもあり後の花も抜あと
給の奥多も生抜まるべや又支ものあさ
ゑも書あるべとて書むあるべとむ世界のむあと

きてるおのずから表ニすることなく文盲のさとし如
▲東松の雅文又ニ弟てハ花ある事ハ仰れとも唐三花細
葉花の花乃支考の俳句をとゞめ玉ふ支考の
又ハ一瓣ゆゑ花おもゝ孫きるゆゑ多ハ さて 唐三 又秋
の初ハ白花已ゆきの葉ニスハ杖の色あるゆゑ
いろ又雅月ハ白花ハ 本式の人ハ雅風ハ去
れ又花ゆきゝス表出て方ゆゑの樹ハ焼ハ時ハ
雅非樹の色ハゝ捨ゆゑ唐三花さるゆゑ仕ちゆ程
唐ノ色ハ表出る付ハ必花を引上るゝを俗出ル
又非樹花ハ白花ゝ花ゝ和風ほ本式連の点式ニ
数て殆ゝるのゝ和いえゝ法ゆゑハ俗ハ
本式 奈の出花 除おの花やゆゑも其ゆゑの正花ハ
て花ゝ黄歌の二字ニ宝りぬ
白花 奈の出花 巻の出花 正花ゝる一と先ハ中されき
▲氏三楽及矢吉式おゆの巴子花の仮ニ各ゝ宮
あゝゆ古の色要格の部ニ拳て表梅を加く

ゝ伝古今おの今拝金ハの西ハを考ゝ正考の
ゆハ和も宋用ゆ拝て考ゝ宝ゆもあゆ
ゆゝ考ゆゝゝゝ他の句を作ゝて之ゝまて
自句ゝ高ゆゆるおゝ巧もあきゆハ巡宝ハの
葉考ゝる花ゆり栗の出花除おの花やゝゝ花
ニ拳る非正花の中古式の花おゆゝ考花
するゆを高て和文獨を結ゝゝゆを表セニ
ハ故ニナ招名用ゝるゆゝ紅刈ゝゝ
ゝゝ和ゝ拳ゝる去末の高ゝゝの表祇を
拾ゝ句只ハゆの花を雅おゆ非樹の矣作ニ代む
とゝゝ風雅のゆの考巧人ゆゝむゝ

△非正花おゆ

花兄 花柄 赤き花 花芽和 花君 花芽
花ゆ 花畑 花櫃 苗花 秋花 月乃花
風花 高おの色 雅花 花田 花色 花傍 花帽子
浪花 ほの色 雅花 花を栗のゝゆま花ゝゝき

カイ印ハ

花ばな　灯のもと　大花（花ヤウトハ花やうなもの）　花子
仏法　一花さく　二もん山吹　千去
乃こや　乃こひろけて　花橘
ウヤムヤ　花橘と橘とをくんで一山一縄をかの
花さそふ　付もむ　奇の伝く　如
雑体　出根の赤きもの咲ぬ
寄五　はきの花を引て花浮を何と出根と書き
花と云て決て木瓜をじと云あれと何のなきさぬむ
あれ寄と　橘や　橘もと　手挿き　橘を角う　如
▲橘を正花と代るゆゑ法　仏花と正花と云る
なるれいやいろ木瓜と　乃西るもと　民正
花を付て赤きもの　非正花と　初る方よし
寄と　橘を付て　何れを正むと　人の悲あむ
うの　寄の花の　手と名を付て　ま　秋
ハメ　花を　乱る　山の世月　ソラ
伝聞　碗　命ものや　寄の白池　りあ

仏吉　花のある　雪の川　花と　花咲て　イ悲
菊州　白寄と　あんもさく　みの月　叔　牧童
三笑　杖の　と　枯れて　さく　何の花　搖東
竹　芋花の　芋和　後和　芋和　寄　未後
山下　見寄う　徒然草の　花咲　て　胡中
冬菊　下と田の　花も　万へん　さく　太大
千百像　月を　と　完く　仏や　千と　の花　除風
寄栗　文都　文と　枯屋の　むも　才九
三元　杖の　ひら　枯と　小栄　恒　水甫
白兒　杖の　花と　ふ切　何の　挿　書山
東山妻　花後　初る　行　篭の　杖　東恕
十七　陽富　と　枯と　月の　花さう　五寄
勾　汁の　と　と　杖の　風む　貸水
舟サラ　風む　と　曲へる　大の　ちつ　きて　菊
伝帳　寄ちる　や　馬も　もと　と　る　山　東吉
ほひ　ラス　ちむ
文花の　文や　文す　文乃寄　二門
文字寄へセル

カイ印に

十七
、
艾蒲
枝
少
浪
蓮
岩タ
梅十
白仙
世
金銭

長て生る列卒にむさく雪の空　大圭
咲を六のむ又のあるしるも　五去
美菜つむ畑や春の夜花　比杜
夜るもそこに花多のおそ　涼ト
るる月をしあ庭のむ　之川
原のむあるる杜乃　和　風　倉嶽
む此連を久しくてのむ　汀蓬
松矣ろんのむをさく〳〵ふ　秋飛
ち孝の麦を麦を孫乃て色　有梁
とろ〳〵ホさしむ菜のむき　苔角
花子をろるきゆくの袖　キ角
他社あて花子も咲れす　九皐

△正花に有名花三去　七月及多考

有名とみる名も三去に八字去の仏く
ろやく〳〵するろに花むの後　因民
三月
・あのむを咲もて咲花けて　涼ト
知去
・うのむを咲もて宿　寿て

きさみのむの生い空あれや　ウ中
むのさく付く雲ふる山やある　芭蕉
・けーのむ仏の日とておちし　侯吾
月もて咲のおく原居　し　嶺寺
・けーのむさても見るに候せう　義人
除金て居に杜丹のむ咲　仙呂
むてあるそぎを病後の名分　季俊
・おく〳〵孤ふそのむ咲て　苴二
春のあの今ぬ去むさう　東如
・おい花てめて柳のあくる　白杜
芝居やむに去の麦何　栗ル
・祈あの一えん見る花　居　沾木
不る交るむさく山のあく花　義
・むる花き坊ふの　お　孔　宵九
ちるむて居き化粧の瓜　以之
・中陽も祝る　ひの　去苔　湖和
ろのむろの月おく置して　陵石

陸の東

月

・美和〜足えて妙く萩の花　松坊
むの枝に月を付てまりはこ　風之
ろろこと〜表て むに月の弁　怪吾

凡如

・門みのみをあてて〜 梅む　支考

矢ち〜〜ぜ〜ぜ一月に体のむ　ウ中

加

・宋伯の上〜妙て宋の花　夕市

△非梅の花字就不姫

孫反故に杖も寄ろ松花重　盍峰

文孫

たろも出ろいろんてあ〜　莫二

句より人のんも　ろり花　ろ堅

多者

△去正花

花供　花法　花会式　やすら花　花生（代五八花二因タル名ク）

作花　紙花　屏む（作花ノ俗）　花娘　花翠　人ろ一世ノ花ム

花の孔　花の孔　スタタクむ　ムの花　寝笑のむ

ぶろ〜ろ世ろ和あれ〜ろ母て用す

三千　やす〜ひむむの宮ろ　ふ袖も　二

類　宮ぶも宮の泊の　作花　桁柳

紙むにあ〜母の文を　逸答

三臣

花仏　咲むもや〜ろすしてろ　嵐吉

発教　梅法を宮ろ花の妙のむ去　二

シ、　花むろろこ宮ろて　昇角

ろも　あ髪のむ〜む再さ〜ものう　琴陵

花仏　あ〜ふろと入和〜ろ花の孔　雪

百鳴　四倍に花億ろ弁も花ん　翁

花仏へ化に〜ろろひあきろ〜ん焼きろあ〜す

△他季の正花　一宣二

独花　宣笑ろ法花　花笠　花楷　非宮の花（正上五正上五）

花天　花灯篭　花の孔（作花ノ俗）　花角力　花陣

日上二人ノ比　花和尚ふ　陣む造　花炭（作巻ノ俗）　陽炭一花

宣吸　花ろ　ひ孔も世宮おあ花と母て用す

翁　花　押も　押れす　りホ

台　、ろ花ろもむ　ろ〜おさ寸　楷　松りし

一楷　つむ孔〜芝生　芝生茂ろ　花の孔　陣風

宣ろ　楷阿大や入おのろきろむ宣　七る

花天ノ俗　カイ印四

さゝ氏　花火打して　星変る　こ　翁
あ〜、花とさ〜る　苔の一親　キ角
苔あと花ト押る力と正花ちう花の俗
烏仙　迷惑おあい今ものむの沢　天宮
、手ぬい今をたむる角力して、
り　、杖あれや浅の白根を忘の花　信化
新　柳実あの木のろをむのんを　峯白
分　木色や枯木うむちさあ臭　之川
名　花も祈も　杖を　杖信
炭　母之の梅は梅の花かみち　コ信

[注22] 花ゑ苔雑を作る時ハ去秋合作の白あれ共
ゑゑ作て ゑゑも立ゑあ指を仕ゑ上てゑ力ろ
時ハ指ゑゑ白ゑ変ゑ人
▲只一面のハ作ハ変ゑ変て注あゑ一ねちい
去指を作ゑるむ苔ゑ只月と分むゑ白ゑい
ゑのんあれ〜白面秋を決ゑて〜
白見　おゑて花人　抑れ　梅　換　翁

拾　花ゑをゑゑむ　梅の苔候　寝殿
苔　風ゑむちる　る後の　笛を敲　力弓
三　、風ゑ付て　て花の二ツ三ツ　、
一指　、大時ゑむいんのむゑて　仙尾
難　、候むゑ背の　背あ　約て　紀角
喜　ちれゑをむも　苔の　苔の　俳表
奇　、梨毒の苔や　今ゑゑむ　りゑ
育　口切ゑ苔の十後の　ゑり候　相如
△花ハ苔を用ゑ資格　斉ス
冬　たひ衣角ゑ表ひを　おれ　羽星
帰　、宗人も表ひの表ゑ　跡迷　東吾
休　跡迷ゑ表ひの苔の　月択　岱水
後　梅候初て　立花ゑます　化
暑月　冬篭む親の　後の形ゑ　泉石
△月花結ゑる白　王二　多俗有
[注26] 月花結ゑる白ゑ作ゑ
[注27] 月花を一白ゑ仕ゑる時ハ上アゑ中ゑ指ゑ

丈一甲乙みなこの月花引歌て宜しき事

▲初の月花は一時花月を兼ねて自然に花月を引出す事も有り

又月花を花を引出す時は月を兼ねあり

月も花も白き角あり花を付る

丈一こゝて切りの位い才二のごとく

あり　月花　月と花比らの言葉を少うて　翁

他　甲乙　信奥いもとうの月のおくう　、

雅九　みなみなこゝたもの色あひて　、

桜　枝もさかる月のみなみて　方九

与　新月は花の咲やきつき色　千川

お　月の秋やくれいもの去　太大

一橋　花は入る月を金の新美　左志

浪　色色と連て花月の月　注者

ウ　一面の花は月松とおく　陸　水青

赤墨　孤立の花の上ある月の色　右範

イセ　月花を要は唐る歌は歌　茂妖

ヤ　言葉人は名所を足する月も　母去

ひき　ウ　花は赤んよ　月い掩よ　口通

イセ　月は　言櫛の月はあり　お紋

教位　、ちるとは唐の照白　ウ　キ角

義　ウ　花天ともの月花の出　佑木

△初おちるむ唐おの初むの書　多有

宗祇　花は初中後の位は芽紅候初盛散残の義

▲他は花月のさまあれ時の所を直て付る

おのゝめるの自も花ゝ〳〵古いるゝ人

出るむ出る侍の自作をひくさ人

言光　ちるむの今ゝ衣をきを　翁

咲るむを花　紅葉　て　木鶏

印　ちるるむは未ゝてきき　敦生

初むの百葉唐の時あれや　翁

一山風花の所のむの　月　許六

匂　は去の国はむの　逆ゝ　仮村

花茨は山門住ちの花ちり　朱油

、　花盛　住花芽を引出ゝ　六

夷　初むしは田のあぜ道をうねりて　支考
茶　ちるむしの花きに化粧の水元　以文
砧　さく花に梅ゐのさらを拭ふ　南甫
　　ちるむしあるあるの戸を叩く　信化
　　されいてそれいに花より梅して　百子
　　△他キの梅に花三去
元祿　花屋の文に梅の実を除て　翁
　　ちらや社にの花さうり　古益
冬　方角き山梅に梅えむ　カラ
　　たい夜留に花花をおり私　お笠
　　とりの梅のえあり麻畑　涼ト
　　時めきてうすのあるいは月を　村女
　　△同キの梅と花四去
宝永元　実に位ち梅も梅もむとあるふに面を
　　去て只一あるべきやや美作の名を実寺
金毛孫　花と梅五句去て同面あり

▲同キて五去の俳に元弟子他キに多し
他　うるの梅梅して　梅家
　　たむて俳を登るも今始　木白
五句の表七メ〻ス去ル　面出て岳あり同面出る
俳に出ル　三寸面の俳に多れ〻黒寸
△定句に助字の花を詩する
小校尾　花に表く引上てるる又面きれるも分〻き白出
さるをむて花をすきにあすおのつ〻先く広りて
力仙ウエメに迫るを花花とするく是を花出さる
時に秋夜を大風夜分を天空にる花の白分
こ他正花にあるく分さるをもつに正花を
分〻不用くかに分に助字の花をする
炭　三手の男る亞を下て美寺　コ屋
　　に去ちどくやら花の新く　り牛
　　に花字村ア〻とて18正岩字の事を表下に
　　美れて世の弟乳ある花あれいちるむさむの

正花ハ桜ニ比して直伝の句ニて付合中ニ花字
を入るのミぞ正花と花とて上手所ハ揃ふ之
まもる一句も多く出ぬハ其本意なれ文的

△花の定の事

[表二] 月も定といふハ付合の辞多ニ依て七句メ
十三句メの定句をまて定座と守る作ニ是れを書く時ハ
月花の座を忍と有しも七月の式ハ制に[illegible]されと
古式の表八句ニハ月花巳下ニ出て花を書き面と定む之（八）

▲花をせぬ不表ハ月句より揃ふ歌仙ハ三句目
句ハ五句目 往ハ折端の雑句及二ウ三ウの折端と
挙句を末座として書二三折の表の端ハ苦
しからず余りニ於ても此式ハ句揃ふ之
花を定花と付て後折の花も定座と守る作も
あり但る句花哉の花は引上るハ秀

キツ歌仙

白 陳ねしの当昔のぬ[illegible]花筐　杉風

九オ 縁あれハ伏見のむも二本みて　岱水

佐賀

白 嗚呼都ぞ降りる小亭の雪の花　佐幸

六オ 花のさかり町中をよふ　翁

△花引去

去ラ 発句

庄 七ノ七 花入の嫁ハ大きの作花　伯楓

月も女房作の傍を帯　右琛

イモ、千人の其ハ花もなるくら　八至

、高根の月ニかめむもあり　而新

東去 歌仙

庄 九ノ九 胡蔥も絵も花さかり　君仲

ゑもて来て見れハ小素の垣ニ花　文老

文月

、蓑もの居ハ伏見の花ちりて　壺平

、口切ニ茶の十袋の入り候　秋如

初折定座ニ於て後折表へ上るも是より
ききよしる句は表出ぬハききす其巳上之

△花を嫌ふ事

[八七去遠] 花を引上るに二本あり一ハ一座書数すくなき人
ゑそ其人に花を望む時其句なをまよりまよう
表手を出でむを望むとを嫌ふの花とよ

▲手俳出を為る時其人花を辞する人あり付け又
実を分て次に付て其次取て捨て又去て留き
花宮住と乃ちあり以宮住と又去と出去の乃
ある付の乃ち花を付け俳出と仕て花をすて
又一つに其人取去あり他に譲る者人もあり
もよく為る付俳出を付け花を作す
▲よく為るハ花分てよき去あり白出るをて
又南作の付け五三ずつの白とあれ辞退と乃ち
他方とも引上て作る依方あり引上る後無の花
老成るの乃ち南人の会の式方の稽古と為る
▲南人ハ他の宴合又祝式の会まし
又乃ち代る花あり先に花白と乃ち人の白花
き付為る為おくべくして花を付する乃ち
▲コハ花分てきおる出る付花白の次乃の人数を
代て花分てき白して付する乃ち者の俳拾て
月花を代る乃ち又花白白白ウ方

コ表出る付け 花を白と出を又去てする付け
他キ白てい花白付他キて乃ち是俳あるとも
かくもさてよき和て花付てとく（きるべ
ウ
芋村ー性去て 乃ち行事今 箱
乃ち人の発ち花の答し 付 去来
ウ
芋の辛き声て叫出ー 二幅
芋の花白る芋すとのちり 乙形
初むー紙の者持 居並 弦花
ロ
口和ちよくて右の正月 松阿
花辻の占を芋ー性出す 開松
芋の方乃ち白の 花 松乃
二花
ー風の乃ち和千宮乃 支形
芋の院の今て形会 仄止
寸白も引て入ち花の出 及条
ウ二
蕪の彩の住れくの声 楓里
立白ー座て白の花を入て 素民

花
ひさ
ムウ
皆
反

侍

花ゝ　初ゝ　ちひ去の百　李下
花ゝ　高ゝ　シテ　有よう　フ舩

△時出を待ぬ花　多者

艾葉　花とし来やと思ふ事ゝし　義
松実　花よりは　拾ひ　丁と　九条　元峯

カ仙ウセ月花ゝ花入代る侍多れと書す

△花お後百風ゝ苦　七ヲ及多者

花ゝ風百を許ゝ寺に祝式の人ゝ之稽ゝ苦ゝ是ゝ
除て自立を侍ゝ百を寺侍を世風百の白ゝ
未完の花を毎て出ゝ春れ　対て去世

ゝ百ゝ百ゝ　打百のあ　柯山
さくもゝ　合者ゝ　上百　貝高

再て　ふりやる百ゝ　他ゝ　支考

対

ゝゝゝゝゝゝゝゝ百ゝ　十丈

百いろゝゝゝゝゝ　ふる　言黄

難

ゝ木も時も　わゝる　ちの中　知水

ひゝを　ゝき百の　ふり出ゝ　羽黍

柿十

保百

花の原　対ゝ寺　芸序ゝ　去来
深ゝ　ゝ　ゝの　ゝ　ゝる　義百

勾

花さゝ　ゝれ　芸を引出ゝ　許六
去ゝ　ゝ百の　ふゝ　ゝく年　朱油

低

年九を　対て　ゝる花の　艾絵
まゝん　合ゝの　ゝく百ゝ　限化

岫

打打の　他を　使て　神の花　限岩
樫を　おゝ　ゝん　ゝる　孝

捨百

ゝる　ゝと　ゝく果を　風ゝ　東方
孝一　ゝ　む　む の　一付　義

限

ま風の　ゝの　開ゝき　仕る付　外九
ひゝんの　む乃　ゝ　ゝゝき　陸　秋遠

キラ

和ゝん　ゝと　風の　拾考　伯楓
谷ゝの　ゝゝ　ゝ　ゝれて　花筏
拾さゝや　毎ゝ　ゝ　弱す　花の奥　千川

ニ十

ゝの　ゝ　ゝを　ゝる　去風　口連

拾

ちるむを待セて月も山陰う　桂楫
宗〻〻本風の名る所も　叩陽

名

三石の申ス屏ふ花さく　尚白
ハツトより去の吹降　翁

限

△風ふるむ残ふ蓮　多有
秋風ふ神を吹残る　鶴声　路芝
寒ふ行ふ寒の芝ス　文麦
むい咲ちて除く　おの色　イ吹

△花お所名伝不苦

お大下ノ左月ふ名伝の対と印く　お所の蓮かし
されるおようあれ付対ふ　吉野ふ麦ス対
ふも伴ふ色とふ左ふ対ふ　青のふ青のふ色対ふ

宿

柱を凡を花ふ　花ふふふの　り由
ふの山　梅〻〻ふる　梅　許六

花ス

関白のお成のむの咲ふり　、
小金　嵐ふふ面ふ乙ス　、

東山

白梅の寒所ふ　ふ色

三年

仏の通　花の名きい　木因
約名ス不二と青のさ二不芝　ふ鈴
雪をむふふ又ぬむの雪　甚二

り飾

青の〻〻神も白ふて嵐山　由洛
ふ〻あ〻れむふあ〻れ　ル老

開

赤紫ふ芝の　孫自吸ク　武柱
月雪ス梅も二度の孫子　尼文

△二老一白のむ

月花を待ふ白　他キの花　猪の花　正花の梅　孫字
右ロ二ノ内ノ出ル片ハ白句ニテモオハセス
賀お花　風お分るむ　名ス分るむ　花ふ梅の対白
神尺名名ス表ロ表お　名ス分るむ　花ふ梅の対白
又外ロ仲宝ヲ伴サス　又外ロ仲宝ヲ伴サス花ハ月ヨリ制ヲシ

郭

掘書の木のふを　三度ふむふの梅ふの山　峯白
ふ氏ハ又ふふふ　仙化

△日孰向の冬変格

去と枝 花の表宮の泊は七ヶ口通
糸 入ってあり青のくむの奥 義
ヤヘ むは泳めむ不二の絵を出 京花
寄乃ゑむ芳あゝの志げのむ 示右
枕草 紀広の四使あれい笠の花 布胡
さるをまさえぬとあり千せのむ 巴兮
拾尺 矢傍う花ゝ傍人も来す 義
むとちる多い志雲の陸陸て ソラ
かも琴 法下い泳て四さる宮の花 路矣
琴 雲ゝ末琴ゝ殆て泊の花 東ち
樽 山四は大木の花咲られ 西楚
歳 むさけい山の奥を作ひて 呂杯
天向 さけい尚さらぬ先も花咲き 衣勢
候 候ゝはゝうひく笠の花咲て 船曲
笠 ゆるされて為のむ足の図書 足弦
又 形ゑちをむ足秋の行設 りる
一白の風伝おの行机矣ゑすて改てゝあるゝ

文もけおゝと足弟も生ゝすゝきゝ
△雅花変格
いゝるれい風宝の人のさゝゝや ソ至
根ず 古梵のセゞき 花血を 清風
悔の声絶るゝ月足宮 義
花ゝい柳樫を宮宝てむ生れゝ宝ゝ対て
花ゝを花ゝ押られい泊ゝ志を続くべきを写
ゝ花の志ゝるゝ行ゝ教ゝ仏ゝ
白多ゝ 一度あゝるゝ二度もあゝ わ枝
まちむ杖い春ゝ生れも 支考
肥ぬゝ志ゝるゝ直教ゝゝ 医者
おんてゝゝすゝ考ゝ ゝ 矢音
七さゝ いゝ七の傍白ゝい不改 花咲て 凉ト
仏ゝゝゝゝゝ絵仏後ゝ 貝宗
焼大ゝ刻て 彩琴す 常久
金彩 花の去月の枕ゝる世を 義 仲二
表込れて除教ゝ考ゝい 其客

よ〜ぜ〜〜来てきゐぬ山椒　茫角

白山　嫁迄も廿九年のまを花　天素

大るのるの〜又てもなめう　ま

是皆立き花を作て雑〜〜う注する付て

花人ものもう住れも雑ぜ雑ぜ変格れい母てい寺

但月花も琴ものとふ白の雑い為し

台ウ　作花母乃きりむを何て　山りし

作むい雑のおれも大方寸を陪う

本お　糸おのむも色とん走り　涼三

コハ注ものを去るを伺て雑も〜や考す

かんきの殺い花ようえるて

[中中] 雑のむい杖ろうものるあきるく力仙ウ

八句ようり月杖を分る付い土白メの花寸及

ろ〜さるみキを陪る為く共色ん雑のむを

出り花ようる白去て又去をするのおるく花妨

花聲も稚天の何て雑の正花く寸を付

ぬく付い又主花とい

▲武注皆抜之月杖は花のキ接い常く注ぬ三の色

キ接部はあり甚ろん何と伺を絶る季陪ぬ子

ものー又雑むの陪は必ス去をすぬコモ雑花と又去

三去ぬコモるー又花嫁雑太方雑ろ汲す又武

かんきも「花より又ものて」ぬろて花おくて

三れも何れい去ものもむ方ようむ只花おき

トてろうい雑て正花はあす

△花注お抜は拙お の作　△

[中中] 実注我は水仙花注抜本の白を生す付く

陪むは陪る為は多く花おそ件さるく俵う

夫の作て及ものかき付い「みー拙い寸のまを

去のを」おと花を陪て分て去キ陪るく雑

▲只古式の注く雑及注子もさり陪形の抜い除し

古武ろもさるるを再せ稲そ雑て二一又一

白は花陪て正花るる付く陪る拙おるれい我は

本歌い許さめ侍れ共字定後は本文出来
手段なども文次は花をせさ茅殘い苦らし

△橘を正花とする変格

新　三段ものの橘　仏化
　　三段ものの橘　朱弦
　　ムかりくむ世てい惜の花

家を奇とむムあき乱世の伴とえち武れるる効の
三段と言の山を臨稀あるく只その奇も殆
さ花梅の花は字き多くと接事の世を数付
ある故に橘にはて付きあ不

八七義　去来むを橘とえむとして翌日れいて来日
九義い橘にあ尼といる一面にするゆまして暑中
早変むい橘をのるまー翌日されまを古人い
昨年の内にむい橘く毋らいて不れるきにあ寸
されと見方の橘をえ一冷あくむ始文
　　糸橘　板一ものムを咲えい　去来
とはくられい白氣作くと実のて

九八義　翌日付今は一本橘のるい細川法やより花咲
先生と口決ーあくと正信あくとと文后文に用る
去あのー去来猿あ去去来の花を畧て彼信を
解さり却て橘にあの時い咲冥或い答とて字
をおくまくを正花とくろゆあるく始
▲翌猿あのよう出ゆお蕉歩に用れをかいて
きむ猿あー又咲完答字にあい橘用て
よりむと出る非く新あに橘不実歌の人を付て
実歌する人の歌を述る手橘をえに糸橘の付
二白の花色のくて橘あて付付寸とて付白
あくゆと撰集の神猿にいと伴されむ

百　猿あのを又張て正花に橘する人もあり橘
非正花初心の人するゆあれ口信あー

ヘンコキ　花とて言実歌の却名橘只一色の上へ和橘
匿橘山橘赤の名字抜或い除く或い取ー以境
に入てにみくにひて無と言るうて

▲定家卿梅のてい付の事梅書ふて百
も陪しく仕たまひ梅ニ之一論あむ但定
を引上て七寺宮定家卿又書て行る故
宮様侍女の紙つゝみ下ニ挙る比俗の云く
花と垂てるとき匂出来る所あるむ

[六ス俗] 百匂い花但梅ふれ力位い百匂三ア一乃
匂あるて一ふるるいおゝ一ふい多ゝされとも
面の宮あれ共先二ふと中古已来宮れ〻梅ニ
初れニちる花れて名花ニすきむあゝ又
より匂あるとてる花あれい胸底の俗を左
て梅ニて併されてり

▲己う梅ちるニ梅ふを怪て我も宮るふき
をひり初れちるむ俗れさくむの多俗い
又さるや又梅ニ之てる時ニ〻〻ゝ〻ゝるを考さる
や又カ位い二れるれい百匂のまゝとて京も
いひられ三ア一ふいいさるそう

[天] 梅正花ニ用ふ故式白花ニ作る歟三ふ寺
▲只歟ふ山千匂オカ九「初人伝て伝ゝ山梅ハ
俗ちて以るふゝむ花ハ文さふるゝ
歟後の俗ふて考る

俗梅 刃ちゝ呂さふちれ梅花 木因
小文 蕪屋ニ初き梅ニ咲出て 養信
秋百 梅花片ニ咲ニ脇さり 水甫
文政 梅さゝちゝお海の仲百枝 僧源
試比俗ニおゝく射ゝむと付るふきあを母
まて梅ニふさり後て祢する付ニあ尺

匂
毛ろさしの吉野ニ岩ニ牡丹ゝ
我国の吉野ニ山梅咲ニり

[吉五] 毋吉の吉野ふ梅ふて牡丹ゝと宮の一
字ニ姿位を分ふ今花ニの幸あるや梅ふ花
位ニ当て我国の梅を移をさるむや代宮ふ風物の
意地ゝて平ふふ牡丹ふ梅とふ詞の花と初き

▲用ゐ来りて強めくされとも是を再び稍あむ
白日きとゝ梅に仔注の降ぐ
注人れも侍すす尾上のくりも

古今五 是い和山の麓とゝ和寄に数る便類にて
五もーの号て二花を便ち梅に代世のむ彦に
あて底仔を行に梅に花い注あれと宴に号さと
に対いむに梅に梅にあーに梅に有に むを含
られ交梅の内むをすきにあと其注の底仔い
一決ち仔仔上の三字い行所の寄の点を梅う
▲三八注一世の活あれい再するあれ伝式如花
を対むい寄あ一但号とむを含うと足あい
を交仔に正花にて実注い他き離ても梅く
れと言ふい寄れに内むを分ーと足内む
も去のむも中正花あれい有に扱を分ー注も
あーあて書梅の扱い古仔をく初て後已と
う対分て形ーを分るこのこ

△花は梅を対梅にむを分る世言

本文 古より花に梅を対るあ世言
に仔注式い梅翔の有に有白の花にあきる
梅あーに内くに内くへきく但若い梅にあす梅に
あーさるにあすとして寄家の仔扱に嫡

ウ 幸侍乃松い花より勝て 義
山に梅を去ある去 面 千那

侍日引侍や去世の人行に弱あてひの言根の
むを足るぶと言く脱るるも幸侍の松に
勝て面白るむと秋の河を引て決あ仔
白のあ有く梅い引侍や去み那にあれーを
昔あーの山梅ぶとよみー交あうの風家
を対ー幸侍の松を花ようにいるに山に
面の梅にいるむと梅のお根を去れとそ
▲赤白のむい侍に て次あれるむ侍に梅を
足てに白とえに乃松の面乃体と足て

面の梅に幸侍の歌を宮こうゐれ一方
卯字「比」[illegible]「移」[illegible]「お」[illegible]
[illegible]に中あきい枝立
[illegible]きさ又ぬむに起生て
お　ちれて梅の木陰の
[illegible]花と梅のおいそ[illegible]まと[illegible]
あるにすりて吹くのむいちれとりに[illegible]木の
梅のさくを又むと起生る梅に[illegible]て分
ちれい梅とちれいさくとかすりる泊と
[illegible]　卯　古する石の[illegible]花又　卯信
相撲に泊を移る梅や　相撲
[illegible]の不動の[illegible]を相む仲
[illegible]卯字あるを交卯字を記てむ又と立て
泊の移に相撲を投捨るも此梅に[illegible]を付
うりやい詩く○[illegible]梅[illegible]ト字[illegible]
枝　卯　花すに泊[illegible]に碑合　立此

山の梅いにて　庫の尾　国友
山川を吹屋る　巻の書　義
[illegible]さ〳〵尾の衣　[illegible]　丈州
むふ〳〵糸を通と人やいむ　コ糸
ちく〳〵の裏[illegible]き　[illegible]
[illegible]　卯　[illegible]る花[illegible]　乙形
[illegible]いやろ八重梅　泊[illegible]
百万も和[illegible]花乃去　今下
田[illegible]きれて梅さ[illegible]き　残人
肩衣に再むのさけに　支考
御山吹　松梅と　義仲
紙むうあ[illegible]の文を[illegible]　逸[illegible]
梅[illegible]　[illegible]
戸も[illegible]流の[illegible]　此[illegible]
梅翔と[illegible]　蒲[illegible]
花幸と[illegible]生つき　暴[illegible]
梅に[illegible]の大翔　考

カイ印ロ

梅山　オ

山伏の山とろもや山　梅　許六
ゑ金もまつ一ぱいの花　太祇
梅さくや新牛の白さく　洒堂
やすひしの笠の小袖も　基二
梅を古寺市の麻川　竹義
大和路くるとそろもむ　嵐雪

三午　ウ

木　イ

□木苗就不煙　古八二去
限ニ苗植　付ろ〳〵　義

一ハ梅

ハ〻花入ハの厂の中ニ　作事
やら〳〵一原　松一度老　〃

吉拾

業やとの家ニ不き厂ハ　義
ハ舟あれい行信丁き　去使
作の寄宿一の　松乃風　仙去

吉栗

加ゑ〳〵ぬ傍を笠ゑ苗　義
一ハ月山さき今をまつ　李角
笠竹のそてらを産ニ家の　義
涌ときあ〳〵ふ乃苗川　石雪

雪九

他社を見て花の岩ニ入　義
み木を元まく梅のひこ生　ソラ
苗む〳〵性古そる久生雪　凡兆

廿九

義の寄ハ乃より打中寺　義
乃山の発ハ花の蒼む附　去来

苗川

文弟の中もまゝ考業　林檎
他人の門さやく久有扶　北業
和尚ゑ〳〵留の里中　和文

水仙

行ハ〻ハの原〻ハ星　ヤハ
繋合ゑ毛ゑ吳きむて　冬白

六行

扇衣いれヤ中の花乃去　杏百
ゑ義〳〵る梅の水雪　蓮水

加川

峡乱侍のお例の葉拙畑　倚松
夕日寺花ハ西谷東谷　一枫
ゑ〻自陽の何呼ゑ　素川
山伏ハ拙河の　翁　絵　岐周
杯舟

△木部二去　　古八三去　八

冬　月い迯れ杜丹盜人　杜牡

初花の世をもありのいろめく　、

歌よもゝ朱るむ〻松の声　千里

惰れ〻高の樓乃ちる花〻　文里

羊俗の松乃　十拍　佳風

一稿　梅ちてむさ〻をの脇さ〻　一晶

隨　松の嵐を　中ち〻文　冠那

木犀の白いさあり村雨て　徒角

晩　為船木もホ立ち樓の寄嵐　閑十

蘇　初木の松を花の為奈及　りゝ

越　起てさひ〻きの松の白雪　要仙

棹　流るゆもるて和紫を春附面　歴秋

他安　舟いあち〻ユ乃ゆ乃ゆ梅乃　有琴

三十三手杉ちる　尾　七馬

いろは歌梅ゝ乃山もあゝ　佳幸

、

他　ゆ乃ゆ乃ゆ乃

苗代青田の苗い苗に属し稲苗稚小い熊蔵
こそ苗は稚仲苗の戸い居処「狗苗」衣の属
こと又木の属こそい伐刈しおい苗分こそ菓苗を
食おこと入稲を稚苗の苗い生苗あれい字義も
拘す稲の宮稲の木村の苗い地名「松栄松栄苗
若苗部こと入穀い孫生の狗「林い使生あれい稚こ
木苗の生を生こと名こ森い樹村雑叢も同文こ
木の集生こと名こ比三ツ変化あこ呂物ここ
但竹藪樹林松杜に勿論植おこ花紫貴敬の
おい切こも植おこ手るい植実の花を植おこ仍こ
同伝こさて○舌式こ竹子木子い季を切あこ
変こも植おに赤しきさこ

一名ある二上山や菓の花　小枝
きりの時こを〻〻西風　建角
附　稲塚の陰子を〻に月の出て　十丈
イま　吐とされて休む　苗取　千川

上十
真　氏去いこと　よき花の張　義
陸の中山の西の苗代　植糸
そこと森に風こ多きこれ　りは
匂　腰こ徒て　メこ　稈　汝云
苗　苗苗一枝持て苗　植　徐こ
新白や石こ　小畑こ　仕の日に洞　合嘆
徒考　小畑こ　仕の戸乃こを　作む　キ風
苗　苗の裏に有こ　押れ　義
次　秋の戸乃　肥不人苗の小麦布を干こて　方風
ワ　苗の月　撤の石に　キ角
芽　苗の月　撤の石に　片こ　嵐こ
保　稲こ　氏の　先こ　岳水
松山の去に　つ　の　咲皮　酒巷
さこの苗を　皮に　脚こ　何脱
植　抜残こ稲を　い牛に　極て　支考
苗　ソを防の稲乃五分　逐敬　亡

カ寄
文操

出代も嘉撰寄の寄を作て　甚二
寄いさしーき　森の仿　方堅
秦一至花と表の〇裏もあす　乙文
梅宮　明年と咲て作〇梅の宮　正孫
、　花のうりむの一子お作　二
さく咲し告やる友の花と来て　定純

西花　夕月とさて面白ん五陸の松　竿水
萩咲〇〇　夜の寄原　万水
梅　梅の木の葉を裏と一走　竹寄
門松　門松を裏納ても美め手　朱角
台ツ　毋を恵と〇〇山ちの次　独笑
月やせ花の淺乃水呑て　助夏
多て所多面白一　梅冬　寄吹
梅道　山竿と寄ちの山部の風俗　柳士
、　衣配松の人乃名れて　林仿
二熟ーむとそさ〇梅巻　信化
芦川　紙衣の袴と角おりの泊　和枝

次句
栞戸

式宋拾と掃部の火を吹入て　万子
秋道　松風の寄をお図は　扇水
面の関とすけて歌を対せる　キ角
寄巻と式宋の尾琴戸　才孔

奥
ヤフ

萩の竿を抑る　月　梅寄
梧桐の夕へを秋のしもて　東也
ろ寄ぬ〇寄蕨の下　ソフ
影のあち〇日いるとや　ムラ

さゝ
モリ

翔よりも夏数と表きむん　蔵秋
さゝ〇れ山の杜乃三月　寄白

林
ヤブ

林乃中の家ゆ火をく　乙由
花い今年の夫と吹　梅　支考
ヤブ　石匂乃　柳寄　蓼

みの

△月の桂月のむ兆梅和　素堂
年ゆくい何そ三五の桂月　独
さあきと〇秋独るすて
ゝろきと〇合長寄〇も恒樓

月

十七

、

ヤ

了

九

ゴ

千樹　松人　松之　竿松　芸毋　李冬　雷之　子　丈水

草の名代　美仏めくり　桂の子竹の陰声　ひやむの桂の蕾房の底　おとす　義く　ぬくる　石の穴　月のむ　つくらく　子

芸の字　波もつくらく

川波を裝束されても彩の義

△木草字各三去

わく　原む　程の榜乃木　義　独子

板木の彩　木の実に殆る志め縄　竹司　角右

彩木の色にとらふ仏仏子

時を以て老木の花も寄れ

瞬のさし木も木乃の吹附　可之

行く　ゆく　眠る木の股　如子

陽面也く麻く山の木ぬるう　彩水

木鼠の乞食に彩の下さる　方乃

書こと川の向乃夏木之　月花

秋も皆木芸とあてちりは　梨月

油柿に忘れぬ芸の哀をり　子去

仏柿　柿そと花を夏の芸　義

二ヶ人芸乃　去味

芸村に性古そうる夕まれ　九桃

開く　芸記る面つらひ　間川

角力　出て　芸彩る　三姫

芸の墨き夏芸　その

刀に芸の面るむ芸　彩蓬雅

初花　芸芸く　夏の初乃　子

△松竹　去　吉冬

陽丁面る　末乃　松山　住芸

一樹鼠　何として　松いす　て又面む　、

住の芸を麻に彩次の松　夕市

松みに住芸めくすの子椒　、

他 松葉の祖又葉上下に出たて　廉附
　世接木や世接の枝に名を付て　キ角
　八条も九条も松の名〻　尚人
松 松ふる　声の者に夕　凡　未因
　初花の頃に古竹結ひ　イ茲
他 二三ゑ竹切れかんりと　支者
　あれて葉のうゝ竹　山店
文 ふん物て接て来る次竹　嵐竹
　竹の枝の若よむ老のワさ　若葉
壬 花菖の間をうゝる竹　根　凡麦
松竹い出去寿にあり寿キの極れ伝ゑ

△枝・葉・出去

枯も寿ることもあき梅の枝　卓袋
葉陰の実より取〻花の枝　篠雑
　猫より古い赤ん　芋の紫　子祐
　くゝん　木のも　次丁む　子サン
　枯葉す杉の実の芝　キ角

苗 根 松 苗 杉 悔乃 ゑ 声　虫子
　苗代ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　嵐雪
奚 根 ちゑ　ゑ根をうゝ　風篇
　去門より西の出乃根向て　篇
　根を分て社丹を移す石の男　根リシ
　博ニ根さ　の庭みる根　已屋
　梅影葉まゝこの病のそゝく汁　篇
　仄蔵ちゝす芥子菜の位　凡桃
　子菜奚めくおゑの付　篇
　麦と菜梅の根ゑ移し　り合
　△穂・実・種面去
　ゑ一ゑ門乃椋葉　芝楽
　蔦あ一の穂ニ出て意のむ　秋青
　陸虎も始て日ゑの梅の実　老蔦
　人ゑ付す稀の実の後秋の月　コ十

一樹

極まく人の陶 斤京 清風
夕白の極とる比るぬまたり、
△蕨 栄 面去
庫もすまぶて蕨の面丁 白花
柳の実をそくて蕨 張 茅
月まい許せうき栄の蕨 彼岸
栄の戸陶く紙ナきくらむ キ角
△楓 おなじ栄 面去
△楓も花と紅葉と面去て只一あて
▲譬ばいはれともさるつき程之
△一巻一句の極わ 高そる

柳 芽柳 ヨ名角三ノ一 楊 芽柳 ヨ名角一 楊 芽柳 ヨ名角一 楊 芽柳 ヨ名角

芭蕉

ハ加乃川のあ孔き柳　彼徊

ハ梅も葉乃焼て孔　保　仙去

梅もゝ苦き白あくれり　コ孔

ハ保の梅い孔れのおまて　和尼

ナタアのあれゝ孔くゝまゝ梅　山之

ハ的星や梅宮めゝ山ろゝ　キ角

土芭

アゝも梅のゝ和孝ゝて入る　去朱

ナまもゝろゝ和孝ゝちゝゝ撫きる　仙去

古拾

アあゝ梅枝叶くゝ琴の音和孝　去陸

そゝのむさくゝ孟乃白妙　先放

陵

イ一拾秀る　そゝのあゝきき　和七

□美生表載不姪

古拾　仙祇い只日用の姓すて一拾の人和を仮いわ若い孟のお栽ゝまさくゝき牛あゝとる

文日の時孟ゝやと入孟なす

猫かそゝ西ゝろ人そ孟くゝき　ヤハ

猫

あの花のちゝぬ孟ゝあるゝ　義

掃月の上ゝ色ゝの陵　ハ

大をおゝまゝ拾ゝおゝ仮　杉里

吸おい陵ゝろゝんの拾上て　独同

伏入の丁を二仮ゝくゝき　由之

白彩

ゝ孟い又山ゝの尾乃出孟　琴立

惜で西ゝろ　古ゝも猫の陵合　左梅

ゝ

杉ゝ巣をちる協角の代　望梅

仙祇の空死ゝ花の陵杉人　藥附

ゝる碑ゝ教孟ゝ夫風　一晶

△同生表二去　古八去　義

一拾

年諭く妹ゝ告ゝる叶ゝゝ、

我ゝゝ陵ゝを屋の仇巻　キ角

仙

陵の爪脛宝くゝゝゝむ　宇秩

雑くゝゝゝゝ山ゝんゝゝき　土芳

ひさ

猫あゝるゝもちやゝくゝる　弥孔

陵者ゝくゝ厳古ゝくゝ　正秀

山ト　枯蘆に戸ろ〳〵る丁の声　杜房
出てゆくる舟を教むと　巴兮
小舟やの煙来て休む舟も　該生
市角　夕さを行く蛍一陣良　、
寂寞する山犬の声　義
ちぢ　秋　籠の寄を行病に矢を刺て　約雪
拔上て杖あてゝれぬ犬の声　該亜
寒と林　月も今宵と足むるの市　義
市尾　追ひの鹿を角のあり寄　素牛
き　拭て おろす牛の荷　支考
声もあく鶴の鹿乃小草もむ　神叔
枯　寄あ〳〵り　牛よる声　丈我
あ老爽のさりき敷も冬来す　之乃　独
アメ　夷　柳の青白や　二足　陰
寒きるり油より行セ切　庫月　、
たゝひの田螺寄をのこそき〳〵
△同生教対句　多者

他　山君の柳得に尾ろけ　伊徒
トリ　青茶の月白拍おり足てゆく　義
初茄　拍生の〳〵を踏浅す寄　呂九
ムレ　方も懐のあ〳〵と爰や足つむ　義
限　白夷の名面白き彩狂狙　何由
ヲ　市舟も英名に仿凡和　素
誰　乃中のよあり〳〵格て　嵐雪
ケモ　見まきるり油とあく亜病猪　キ角
△ひろ教に生教・網に奏多残不蛭
古歌　ひろい橋をちる放に柱おに白去とや
いるある志の星るやはそ白生教に二白さる
網に夷多を二白さる例く
▲コハ古式を難すとそ素乃一先葉ろとさる
夷さく法あきるい支考説の例とそ考る一
天河　山も事山るを考く苗代　芳路
花ちも祇園の時に名ゆきて　葉路
柳にさちぬ号乃苗　素

七夕のうき〇りを残す相のて　涼ト
月の篠乃さゝさんさと乃原て　、
アの後う明る由ハ薄　口拍

△非生お日仲生義ゑ茂不畑

非生義ゑ「雷忘の怪お「水を拔ー魚義「物の多熟
田む」義の病名「干支「待形お生義家お拔日
名和名材の生義名「投原「言士ノ義く

雷　夕方の光ー少由る雷の声　楚竹
三　ろもあうゝめ山際乃夏　東臨
さを庫の蓋矢を神ゑ射ゞモ　菊
裏木の乃る拔る花の山　乃り
苔　呆る方も門の書人　富雷
忘　鉄ーて忘ゑ竹をつく素の面　キ角
富　風ゑーヨセて富　物出ー　伊容
コハ　神の射拔乃矢の根景　化明
忘　忘ゑ合兵て亜乃明条　和琳
拾　陪ゑーていさをつゝむ義多　義

古拾　只今のある。彼の味色　夫陀
川度の杭木や義の伝ゑゝむ　似実
ともゝくと呈ロの陪ゑ鄭泊て　カ号
、拾　誰やゝ中出ー寺　金仏　茂人
思入る戸を明る〇て投ゑゝれ　ヤ水
を射中ゑる　示右
ヤハ　ま〇この巻を表呈ゑ冥セて　言水
支　方のめてゝき亜宝の神　右
杖乃鳥の人倉ゑ由く　義
墓　一明〇の神分ゑ陵い月陀て　ユ山
エ　きりの寺ゑ義を出つく　東方
天河　る原の帳乃二性を来る　有梁
ダハ　葉乃〇の篇め指ゑ寺西乃第　幸平
髪由ゑうちも只あき　修　摩仙
猫盗れて後生　一へ人　山民
奇　栗仮のさゑあゝき夕月扶　胡仲
、　狐仲乃のそめく義入　凡茶

加川
糸

蘭ゝ竹ゝを猫の二人　杯舟
花の蔵夫い竹ゝ第月　美文
字る庵を引ゆく月の狐川　里可
竹ゝ作ゝ忘を竹ゝも生ゝ義ゝ多ゝ寺

カヤ
杭

木伊天の牧庵の糸も同ゝ　此志
三上ゝゝ後一月の明　後庵
東山子の月ゝ厂も合点　釈敏

ヲ士
射

る士も間ゝ布ゝ一ゝて左ゝ　小枝
ねぶの黒乃狩ゝ釈ゝ　此角
木弥帯ゝ被ゝる竹ゝ　十丈
美生ゝ我の伊ゝ野ゝ暑ゝ

古八面去
拾

△多ゝ字　三去
めきゝゝと川ゝ字ゝ　此明
ゝの黒ゝ伊ゝ小多ゝ　義
庵多の白き人ゝ　左伊
ゝゝゝと矩ゝ小多のおとされて
大来の名も陀ゝや合衣多　古九

化

拙

限
食

小伊の伊の拭ゝ立止り　キ角
人の暗ゝ多乃明る　八宗
風乃ゝ日も尾尻多とぶ　一南
又阿多の寄ゝ　石　囚入
丈釈い白ゝり株ゝ庵多　宰陀

△虫性字　三去
色も五色ゝ野ゝ　梅文
乱ゝ鄭ゝ乱ゝ明やむ　仲志

△ゝゝ士　五去

挿
十

月ゝ尺ゝ寸ゝ　海
ゝ多ゝ人ゝ寸ゝ　士

皮

ゝ多の市　左
ゝうゝ多れて苦笠を　杜志
後先ゝ庵ゝを通る十弦和　茅ン
ゝ字の明ゝ和おり　五宗勝　此敏
荷を付ゝ宿　宿のゝ士　右範
山高ゝ多荷和ゝ　ゝ士の欣摘　字路
涼滴ゝ庵ゝ字の子供あゝ　新古

白

梅
山

初茶

亥

△亥 西去

亥子の上に居候ハ
行楽
亥ク西くを格を又てみる
、
風俗多き中あるの間に大きくく
盃を
角付
蒔を田稲うに至月の弱
キ角
皮皮皮皮れさあ毛る
口拍
子
るのくくふまくて
梅素
葬れに去西くくるの良く
良ふ

△亥実体二去

孩亥を子るくを子茂の宮
口カ
庚梅を戸塚の宿の伝る解
、
する出に如一神手
止祈
和午に のれんの抓月亥く
キ角
亥毛の弱多お寺原の伝
太舟
手弱ひくてるの次る
比冨

△干支 西去

子

強付る
豊宮乃角
我丞
宮徒の美もきれんふ校るそ
示右
同字あれとも附刻と方角の違あり

△犬・牛 お去

花掲
うまろくく犬の臣に花おて
呂九
まるするう山 犬の 声
羽
牛るを繋てさがのむ
石介
生牛るるもんるセと
口
茂只

△羽・尾・鄭 西去

羽字西をくて三多羽青羽に代れくロ
老亀
る月や刻る大い尾を振て
湖十
西の後去ー尾出の尾の幸
之国
さひきを神もお好の鄭の声
斗牛
向の鄭乃去ちに和さる
拾

△降 回キお去 美キ西去

杜丹去を降く立る降のおふ
羽
午降の夫き月の夕 亀
竹猪

△投　お去

多　あのくりと立投捨さやぬ　義
黒乱五　ようるるる月の投帳　高白

雑　一抱りても投帳い仕すくぬ　千載
新年六の年と投のあく嫁の声　山りと

樵　紙帳もいくすあるる投の声　ち弦
投をふすくて出る選　刃　おむ

△奥・盤　お去

樵　奥らぬ川のあるの港さま　松妖
ゑ　ゑ　ゑ　

仏蘭ア丁よりちりよ　何方友達　翁
バ百ちへ降る羽織の丁　芋

一蘭ア多の衣を笑ふ初丁の声　作春
ハ天性丁倩令かして降り　翁

已上八百句ノ例已下ハカ仙ノ例

丁より色の事来てある　地竹
拒メて松山焼きおれり　支考

砂川
ちらちらの夜初りり　竹
多の月乾てたを立ふく　風牛

二句とも三月末の夜色あれと作美かなり

川獄を走る手矣の献立　芝在
色却
ハ走まちとふあ西お考小石川

同作あれとも献立三点の遠あて許うり

海印録已終